リアルブレイン

森林 深介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リアルブレイン

【Ｎコード】
Ｎ０５７０Ｚ

【作者名】
森林　深介

【あらすじ】
時は２０３０年。それは、日本にとってＳＦ映画のような世界でなく、科学の進歩よりも景気と治安の悪化が進んだ世界だった。主人公、有磨は一年前の事件をきっかけに世界を否定する力「リアルブレイン」という能力に目覚める。リアルブレインに携わる多くの出会いを経て、有磨はリアルブレインの意味、目の前にある現実の真の姿を追及する。様々な思惑が交差する異能力人間ドラマ。

？

さんさんと日差しの照りつける教室の一角

君には何が見える？

誰も聞いていない話を延々と続ける先生？

こちらを見てバカみたいに笑う友人？

それとも、好きな異性の後ろ姿？

どれも俺には見えない。

２０３０年。それは、日本にとってＳＦ映画のような世界でなく、科学の進歩よりも景気と治安の悪化が進んだ世界だった。

その中では、無駄に白い校舎と名前の割に黒くない黒板だけが遠い昔から時が止まったままのように思える。

？．

「有磨くん！！」

机の上から重い頭を上げると目の前にはきれいな紫色の少し入った髪をなびかせ、大きな蒼い瞳をつり上げている少女――――黒木ホノカ（という物質の集合体？）が立っていた。彼女とは家が隣の幼馴

染で、よく昔から三人で・・・・。
「有磨くん起きて～」
ホノカの甲高い声が頭に響く。
「起きてるよ・・・」
有磨も低くにごった声で応戦する。
「有磨くん寝過ぎ。うちに先生から連絡がきたよ。有磨くんが学校で誰ともしゃべらないって」
ホノカの紫の前髪が軽やかに揺れる。
別のクラスなこともあって、この一年間、学校での有磨とホノカの会話は珍しかった。
「有磨くん人を避けるキャラじゃなかったよね？　なんか理由があるの？　先生から話をきいたとき、お母さんは頭がどうかしたんじゃないかって」
明るい微笑みのなかに心配を隠した表情でホノカは有磨を見つめる。
ちなみに有磨に両親がいない今、ホノカの母親が有磨の保護者代わりをしてくれている。
そして、ホノカ自身、有磨の身におきたことの詳細はわからなくとも、きっかけとなった出来事くらいは、おそらくうすうすは感付いているのだろう。
「いや、何もねえよ」
人を避ける理由――…か。
「んじゃ、帰るわ」
頭は――――…確実にどうかしてるな。
有磨は軽く思考を頭に促し、軽く返事をホノカに返しながら、帰り道に足を向けることにした。
中学の頃は、有磨はサッカー部で、ホノカはバスケ部。そして現在は、有磨は帰宅部、ホノカはバスケ部を継続。昔はよく、夏は夕焼け、冬は暗闇の中を三人で帰っていた。
三人で…ね。
有磨はぼーっとした頭に喝をいれ、歩みを速める。

部活に向かうクラスメイト（という物質の集合体？）を横目に見ること、先生（という物質の集合体？）に対する会釈を繰り返しながら、有磨は学校をあとにした。
（という物質の集合体？）というのは、有磨の視点によるもので、有磨の意識に関係がある。
彼の眼には物しか写らないのだ。
正確に言えば、普通の人と眼に写るものは変わらない。しかし、人、生物の認識が外れ、細胞、分子のレベルでしか世の中を見ることができない。つまり、彼の眼にとっては人も物も変わらず、物質でしかないのだ。
有磨はこのことを正確に理解していたわけでないが、なんとなくは感覚でわかっていた。だから「特に変わらない平凡な日々」の風景も有磨には感じることができないのだ。
そしてさらに加えると、有磨にはもう一つ見えるものがある。
それこそが彼に人を避けさせる理由を与えている・・・。
頭を空にして足を運んでいると、街角の大画面のニュースが有磨の眼に写る。
「デプレストエリア東京９地区で発砲事件、８名が死亡、３名が重傷…」
・・・またか。
２０３０年の日本では格差が街を構成している。簡単に分類すると生活に余裕のある者が住むのがブライトシティ、余裕のない者が住んでいるのがデプレストエリアである。
貧困化する国の治安維持のための手段と結果である。
ブライトシティでは、病院、学校、ショッピングモール、住宅などが監視カメラや警備員の配置された道によって結ばれている。
一方、デプレストエリアでは、ホームレスの徘徊はもちろん殺人、強盗などが日常茶飯事で行われている。
治安大国日本の名声も完全に地に堕ちていた。だから、デプレストエリアでの事件など、普通の人はもちろん有磨にとっても全く気に

も留めないものなのだ。
そして現在、有磨は亡くなった両親の恩恵と昔からの隣人であるホノカの両親の気にかけによってブライトシティに留まっている。
本来、セキュリティ維持のため高額課税が強要されるブライトシティでは、担税力がないと判断された者は白い壁の向こうに追い出される。
白い壁とはブライトシティとデプレストエリアの境界となっているものである。
通路から建物までブライトシティのすべてが囲い込まれている。
行き来には厳正な認証確認が必要で、デプレストエリアから不法侵入しようというものなら、政府直属の警備専門武装軍隊セキュリティマネジメントポリス、略してＳＭポリスが即座に登場することになる。
そして、時にはその白い壁が赤く染まることもあった。
ちなみにＳＭポリスという略称名には後ろめたいギャグ要素は含まれていないらしい。
歩を進めていた有磨の足の動きが止まった。
目の前には「ブライトシティ東京病院」という建物が人々を圧倒するかのように堂々とたたずんでいる。
来るものを拒むかのような塀、口を大きく開けた門、純白で新築を思わせる巨大な建物。
有磨の見つめる先は3階の右から2番目の窓、３０２号室・・・。
有磨は毎日ここに来て、毎日同じ場所を見つめているが、それ以上中に踏み出すことはなかった。今日も同じように病院を背に歩きだす。
「ちょっと待ちなさーい！！」
後ろから女の子の声。
有磨は自分のことではないと認識しながらも視線を声の方向に向ける。
するとそこには、茶色の髪と、それに見合った日本には珍しい茶色

の瞳をもつ女の子の姿があった。そして、その子から逃げるような行動を見せる黒髪の男。
「本気で逃げ切れると思ってんの！？」
女の子は力強い声と力強い走りで男との距離を縮めていく。男の焦りもあらわになり、その距離があと少しというところで男の目の前に赤い車が止まった。
男は女の子に向かって笑みの表情を浮かべ、その車に乗り込んだ。
そして、次に瞬きをする頃には車はすでに有磨の横を通り過ぎようとしていた。
有磨はその車を視線で追いかける。すると、また後ろから声がする。
「あぶない！！」
有磨が振り返ると、そこには女の子が投げたらしき黒いバットがすごい回転とすごいスピードで有磨に襲いかかろうとしていた。有磨は頭を下げ間一髪でそれを避ける。バットはそのまま宙を舞い、電信柱に当たって嫌な音を響かせた。
「大丈夫？」
視線を上げるとバットを投げた主がそこには立っていた。
今は何も感じないが、一般的に可愛らしい外見の持ち主であるように有磨には思えた。
スカートがひらひらと有磨を威嚇するように風で揺れている。
「ああ」
有磨はあきれ顔でゆっくりと返答した。
「本当は車に当てるつもりだったんだけど…。あの男、患者のおばあさん達を騙してお金奪っていったのよ。まさか仲間がいるなんて…。」
そう言いながら女の子はバットを拾い上げた。
その様子を横目にしながら有磨も手を地面に着いて立ち上がる。
「あ、怪我！！」
有磨は女の子の視線の先を追いかける…。確かに膝のあたりに赤い液体が少しだが皮膚から染みでている。

とっさにバットを避ける際、地面ですりむいたのかもしれない。
「私は植草チサト。ここの外科医の妹なの。医療道具を自由に使って大丈夫だから一緒に行きましょ」
チサトと名乗る女の子は有磨に手を差し伸べる。
「いや、大丈・・・っ」
有磨がチサトに目を向けると、チサトの向こうに猛烈なスピードでこちらに向かってくる赤い車が見えた。
――――そう、あの男が乗り込んだ赤い車が、チサト（と、有磨？）をひく気でやってきていたのだ。
「やだ！このブライトシティで殺人まで犯す気！？」
有磨につられて振り返ったチサトが叫ぶ。
病院前のあまり人気のないこの通り、実は左右は塀のみ。病院入口までは数メートルの距離があった。逃げ場所はない。
救急車いらずの病院最寄りこの場所で、事件が起きようとしていた。
車はもう目の前に迫っている。
やばい、もう逃げ切れない。
そう有磨が思った時、車に緑色の閃光がきめ細かくラインを描くように突如現れた。
これこそが有磨に人を避けさせる原因である、もう一つの有磨にしか見ることができないもの。
有磨はそれに向かって手を差し伸べる…。

その時、チサトはひかれるのを覚悟して眼をつぶっていた。
しかし、いくら待っていてもいっこうに何かにぶつかる気配はない。
チサトはおそるおそる瞳を開いてみる。
すると、瞳に入ってくるものは、手を前に差し出す有磨の姿と、自分の左右で真っ二つに引き裂かれ横になっている車の残骸であった。
中の男二人は気絶しているようだ。
「ちょっと、これ・・・」

チサトが我に返り有磨に声をかけようしたときには、有磨はすでにかなり離れたところを歩いていた。
チサトは追いたい衝動に駆られながらも、車で気絶する男二人をこのまま放置することもできずにその場にとどまった。
「あいつ、もしかして・・・」

有磨は黙々と歩き続けた。
視線をひたすら地面に這いずらせる。
やってしまった・・・。
有磨は気づいていた。光を放つ緑色の閃光、それが何なのかはともかく、それに触れることでどんなことを引き起こすかを。
だから、あの事件のとき以来、人を極力避けてきた。
人を傷つけたくないから・・・。
沈みかけの太陽が有磨の影を伸ばす。
有磨は、ただそれを見つめて歩いた。
ブライトシティの無味乾燥に立ち並ぶビルが、そんな有磨をあざ笑うかのように見下していた。

有磨はその日、夢を見た。あの事件の日の夢を。
一年前、中学3年の3月。卒業式を終え、自分が中学生なのか高校生なのか不明な時期。快晴の休日だった。
その日、有磨は暇を持て余し、自宅でゲームをしていた。そして、一緒にテレビ上で死闘を繰り広げているのは、いつも通り幼馴染で親友の南山翼であった。
「はい、また俺の勝ち～。」
翼は満面の笑みと少し掲げたガッツポーズでこちらを見る。
「またって今日はまだ2回目だろ！！」
有磨の応戦。
「毎日、俺のが勝ち越ししてるじゃん」

「ま、毎日じゃねえよ！！」
確かに、ゲームにおいては翼の方がうまいのだが・・・
「お兄ちゃん、弱いの～？」
幼い声が割り込む。
「お前よりかは強い！」
有磨は、後ろに立つ今年小学3年生になる…なるはずだった妹、優香を振り返りもせず一蹴する。
有磨の家族はこの優香と両親。起床をすれば挨拶もするし、円卓を囲んで食事もする一般的に仲の良い家族だった。
「お兄ちゃん、意地悪～。」
と、言いながらも優香も暇なのだろう、有磨の隣に座り、そこに留まる。
いつもと変わらない心温まるような時間。
しかし、何の前触れもなく夕暮れにそれは起きた。
「こっ来ないで！！」
母の叫び声が家中に響いた。有磨、翼、優香の3人は部屋のドアから玄関の方向を覗き込む。するとそこには玄関から土足で迫りくる見知らぬ男の姿があった。手には刃物。
「ぐふふふ」
眼がいっている。完全に麻薬か何かでラリっている様子だ。おそらくデプレストエリアから舞い込んだのだろう。
しかし、セキュリティシステムが作動した様子はない。
「いっいや・・・」
母は完全に混乱していた。それもそのはず。警備に特化したブライトシティ内では現在、目の前にいるような不審者はもちろん、浮浪者さえ見ることはないはずなのだから。
母は腰を抜かした様子で地べたを手で這いながら男との距離を取ろうとしていた。
だが次の瞬間―――母の背中に男の刃物が深く突き刺さる。隣で優香が泣き叫ぶ。

倒れた母の体の周辺に、赤い血が円を描くように広がっていった。
有磨は突然の出来事に何が起きているのか理解できず、頭も体もフリーズさせていた。
体が動かない。
「うあああ」
奥の部屋でその様子を見た父が、普段の優しい顔からは想像できない怒りの顔で逆上していた。手入れでもしていたのか、手にはゴルフクラブが握られている。
そして、有磨も見たことのない早くも力強い動きで男に襲いかかったのだった。
バキッと鈍い音が響く。
ゴルフクラブは男にクリティカルヒット、男は壁際まで吹っ飛び倒れる。父は息を切らしながらも男を見下し、次の一撃を喰らわせんとする。
「パパ～」
その様子を見ていた優香が泣きじゃくりながら父に抱きつきに行った。
「ママが～ママが～」
父は優香を温かく抱擁する。
「ママはまだ間に合うかもしれない。でも、ここは危ないから優香はお兄ちゃんと一緒に部屋で・・・。」
ドスッという音と同時に父が黙った。顔はみるみる蒼白になる。
「ぐふふふ」
男はすでに立ち上がり、その手に持つ刃物は、母と同じように父の背中に深々と突き刺さっていた。
「くそ・・・」
父の体が重力に逆らえず倒れる。優香はすでに声をからした喉で泣き叫ぶ。そして、男の視線は確実に優香に向き、次のターゲットを物語っていた。
優香が危ない、その危機感が有磨のフリーズを解いた。

しかし、その有磨より一足早く動いたのは、同じくフリーズ状態であった翼であった。
刃物を持つ男相手に勇敢にも捨て身の勢いでタックルを喰らわせんとする。
だが、先ほどの学習であろうか、男は狂って冴えない顔からは想像できないような動きでそれを避け、刃物を振りかざす。翼はそれを避けんとしてのけ反り――倒れた。
どうやら振りかざされた刃物は肩にかすめた程度、浅い傷を負っただけで済んだようだ。しかし、危機的状況であることに変わりはない。
その時、翼の眼が有磨と合った。何かを訴えている。有磨はすぐに理解した。「男の注意は完全に自分に向いている。今のうちに優香を助けろ」翼の眼がそう告げている。
確かに男は今、優香に背を向けている。今なら・・・。
有磨は翼に向かって頷き、優香に向かって走る。しかし、次の瞬間・・・

ブシュッ

優香の泣き声が止んだ。
男は――翼より泣き叫ぶ優香を刺すこと、そのことのみを始めから頭に置いていたのだった。
優香から流れ出る赤い液体、優香の虚ろな瞳。
有磨の目の前が真っ白になった。

こんなの認めない――――
こんな世の中――――――俺は、認めない――――――。

真っ白だった視界が晴れると、そこにはかつての世界はなく、いろいろな形を形作る物質の蠢く世界だった。有磨の世界が変わった瞬

間だった。
有磨は何もかも壊したかった。そして、壊すことにした。
眼に写る物質、すべてのところどころに緑の閃光が走る。
有磨はそれに触れたかった。そして、触れることにした。
ぐぎゃー、と男の第一声が上がったように感じた。
だが、有磨には関係なかった。
男の悲鳴は第二声、第三声と続く。
だが、有磨にはどれもこれも関係のないことだった。
男の悲鳴は沈黙へと変わる。
「有磨！！　大丈夫か？　どうした？」
誰かの声と共に誰かの腕が有磨の肩に置かれた。有磨は何も考えず
その腕にも触れる。
そして、誰かの悲鳴が上がった。
有磨の脳内に、その悲鳴が閃光のように駆け巡った。
この声は・・・翼。
有磨の意識は突然はっきりした。
目の前に広がる光景――――血みどろで這いつくばっている男の死体、
右手を失い、腕を押さえながらもがく翼。
そして、有磨は気を失った――――

ガタッ
ベッドの感触。目蓋越しにも伝わる陽の光。人の気配。
時は現代に舞い戻っていた。
「あれ？　有磨くん、起しちゃった？」
有磨は重い目蓋を上げる。すると、やはりこちらを覗き込むホノカ
の瞳がそこにはあった。
また、こいつか…。いつもそうだ。
あの事件の直後も病院のベッドの横にいてくれたのはホノカだった。
悪夢から眼を覚ますと必ずいてくれる。
有磨は周りを見渡す。すると気のせいか少し片付いているように感

じる。
「掃除なんてしなくていいのに」
有磨がつぶやく。
「有磨くんのおうちがごみ屋敷になっていくのを黙って見てらんないよ。はい、お弁当」
有磨はホノカのサラリとした口調によって放たれた屈辱にうなだれながらも、お弁当は素直に受け取った。
背に腹は変えられない。今となっては、有磨の体中の物質に化学変化をもたらすエネルギーのほぼ１００パーセントをお隣さんからの食糧支給に頼っている。
「学校に遅れちゃうよ。早く準備しよ」
「あぁ、わかったよ」
有磨はホノカに急かされながらも、制服に着替え、弁当を鞄にしまって準備を終えた。授業は基本的に寝ているだけだから持ち物はない。
そして、その様子を見て少しあきれ顔のホノカと共に外の世界に踏み出した。
「有磨くん、音声ロック忘れてるよ」
「あぁ、…ロック！！」
「音声確認、複製可能性なし」
機械的な音声と嫌な機械音を響かせ、ドアがロックされた。
ドア付近で不審音がするだけで警戒態勢がひかれ、１０分もそのままならいよいよＳＭポリスがやってくる。ブライトシティ全体のセキュリティを中央政府がしっかりと握り、治安を保っているのだ。
セキュリティ技術だけが変に進歩したものだ。
有磨は自分の家に背を向けて歩きだす。
そして無関心な一日が――また、始まりを告げた。

?

?.

学校ではとりあえず寝る。瞳を閉じていれば緑の閃光が現れる心配もない。だから、他人とも必要以上に関わることをしない。関心を持たない。そうすれば傷つけることもない。

授業中、有磨は今朝見た夢、あの事件を思い出していた。

あの事件により、母親、父親、優香・・・そして犯人の４名が死亡。翼は右手を失い、そのショックで記憶も失った。１年経った今も回復することなく、ブライトシティ東京病院３０２号室の住人と化している。

そして、デプレストエリアからの不審者の侵入を許した原因も未だに不明らしい。

キーンコーンカーンコーン――――

諸行有常の学校の終わりを告げるチャイム。

「起きなさいよ！！」

女の子の声。

誰かはわからない。だが、こういうとき瞳を開いて眼に入ってくるのはいつもホノカの蒼い瞳だった。有磨はそんな確信めいた気持ちでその重い目蓋を開く。すると眼に入ってくるのは・・・茶色の瞳に茶色の髪――――

「誰だっけ？」

「植草チサトよ！！　昨日のこと覚えてないの！！」

「あっ、あぁ…」

「何？　その気のない反応。まぁいいわ、一緒に来なさい」

チサトはつい昨日バットを振り回していた二の腕で有磨の腕を掴み、力強く引っ張る。

「いてててッ、つーか何でここにいんの？」

引っ張られる腕の痛みに耐えながら有磨は問う。

「はぁ、この制服が見えないの？　私もここの生徒よ。昨日のあんたの制服見て、もしやと思って探したのよ」
「何で？」
有磨の問いにチサトは困った表情を浮かべ、周りを見渡してつぶやく。
「・・・あとで話すわ」
そして、有磨は自分の意思と関係なくズルズルと引きずられるのであった。
―――ガンッ！
激しくドアの開く音。
「有磨くんを無理やりどこに連れていくんですか？」
普段のやさしい顔を怒りで統一させたホノカがキビキビとこちらにやってくる。
「有磨くんから手を離してください」
スッと、チサトはとりあえず有磨を開放する。
「あんた何？」
空いた手を腰に据え、チサトの鋭利な視線がホノカを刺す。
「有磨くんの…おっ幼馴染です。」
なぜか戸惑いを見せるホノカの返答に、チサトは「ふーん」と、小馬鹿にしたような笑みを浮かべる。実際のところ、なぜ自分がこんなむきになった行動をしたのか、チサト自身にもわからなかった。
すると、今度はホノカがキッと目つきを変え、問い返す。
「あなたは有磨くんとどのようなお知り合いですか？」
「えっ…あたし！？」
チサトは若干の焦りを見せつつしばらく視線を宙にさまよわせた後、視線を下に逸らしたまま小さく呟く。
「んー…ヒミツ…」
しかし、意外にもこの言葉はホノカに大きなダメージを与えた。
ホノカの顔がみるみる赤く膨張する。そして、有磨のいた方向に向き直り――

「有磨くんこれは・・・えっ」
同じ方向を向いたチサトも思わずため息を漏らす。
しばらく流れる沈黙――――有磨はすでに帰宅済みのようだった。

有磨はいつも通りの通りをいつもの通りの時間に歩いていた。
そして、いつも通り眼に入ってくる街角の大画面のニュース。
「少数宗教団体の教祖として名を馳せていた川崎新造氏が死体で発見されました。この事件は殺人とみられ、ブライトシティ内部における少数派宗教教祖等の部類の殺人被害者はこれで6件目です。この連続殺人事件は同一人物によるものとみられ…」
眼から勝手に入ってくる映像に有磨は少し悪寒を覚える。普段は目もくれないのに。
確かに、いつもと少し違う。ブライトシティ内部だし、少数宗教団体？
だが、理由はわからない。
気のせいだ、自分には関係のないことだ。そう自分を納得させ、有磨は歩みを速めた。
そして、いつも通りにたどり着くこの場所。「ブライトシティ東京病院」
なぜ毎日この場所に来るのか。
なぜ毎日同じ場所を見つめるのか。
そのくせ、なぜ毎日これ以上踏み込まないのか。
有磨にはわかっていた。翼から右手と記憶を奪い去ったのは紛れもなく自分である。だが、その事実と向き合えない、向き合いたくない自分がいる。翼への罪の気持ち、償いを求める気持ち、そして、自分の犯した事実を認めたくない気持ち。そのすべてが混在して現在の行動の繰り返しを生み出している。
そして、有磨はいつも通り病院に背を向け、いつも通りその場を後にしようとする。

――――が、今日はいつもと違った。振り返ると、男がその先には立っていた。黒髪に黒縁眼鏡、そしてどこかで見覚えのある茶色の瞳。白衣を着ているところをみると、どうも医者らしい。
男は口を開いた。
「君が切崎有磨くんだね」
なぜ自分の名を知っているのか、有磨は顔をしかめる。
そしてなお、男は続ける。
「一年前の事件で唯一、無傷で生き残った少年・・・・あぁ怖い顔しなくていいよ。僕は君の味方だから」
何の意図があるのかまったくわからない。有磨はすべてを無視し、男の横を通り過ぎる。そして2，3メートル離れたとこで男がまた口を開いた。
「君も自身の特殊体質について知りたいだろう？」
有磨は思わず振り返る。だが、男の顔を直視したのち、無理やり心を落ち着かせる。
「何のことですか？」
平静を装う有磨の必死の返答。
「わかりやすく言えば、君の眼のこと。正確に言えば、君の脳のことだ」
有磨は思わず目を見開き、男の言うことに耳を傾けることにした。

男の指示に従ってついていき、気づくと白い壁に覆われた個室に案内された。診療室のようにも見える。
「とりあえず自己紹介から始めよう」
向かい側に座る白衣の男が口を開いた。
「見てわかると思うけど、僕はこの病院で医者をやっている。担当は外科。トオルって呼んでくれればいいよ」
そう言うとトオルは白い歯を笑顔で見せつけた。
「医者なんて格好はホワイトカラーだけど、仕事はむしろブラックカラーなんだよね。いや、むしろレッドカラーかな？」

不気味なほど爽やかな笑顔が有磨の瞳にこびりつく。
「あの・・・」
ここに来たのは間違いだったのではないかと感じながらも、有磨は口を開く。
「ごめんごめん、君が知りたいのは、君の特殊体質のことだね。え――――んじゃまず、君の見る世界が変わったのは一年前の君の自宅で起きた事件のとき。間違いないね？」
トオルの瞳の輝きが有磨の眼をとらえ、有磨は視線をそらすこともできなくなった。
「・・・はい」
「まず始めに言っておくと、今の君が他人と違うのは、『眼』ではなく『脳』だ。僕らは『リアルブレイン』と呼んでいる。ま、そのまんまなんだけどね。あえて簡単に説明するなら絶望の力、世の中を否定する力だ。人は何かしらの認識を基に物事を見る。たとえば、この筆箱・・・」
トオルは脇に置いてあった黒い筆箱を有磨の目の前まで持ってくる。
「人はこの形状や色から判断して、筆箱、もしくはただの黒い箱と捉える。この認識のフィルターを通すプロセスを失うと、この物体は黒の色素を含んだ鉄原子、鉄分子の集まりでしかなくなるんだ。」
有磨はわかるようなわからないような面持ちで思考を巡らせる。しかし、確かに自分の現在の状態に似通っているような気もする。
「原因は正確にはわかっていない。ただ、何かしらのきっかけによって絶望し、世の中に対する脳内のすべての認識を否定することでリアルブレインは目覚める、と僕らは考えている。もちろん、めったにあることじゃないけどね」
一言でまとめると・・・
トオルはなお続ける。
「リアルブレインとは『否定によって世界という認識のフィルターを通さずに物事を見ること』によって起こる現象だ」
トオルが一息おいたところで、黙っていた有磨がある疑問を問いか

ける。
「あの・・・さっきから言われている『僕ら』っていうのは・・・」
――ガラガラ
重たげな音を響かせ部屋の横にあったドアが開く。
有磨が視線を向けると・・・茶色い瞳と眼が合った。
「――ッって、何であんたがここに居んのよ！」
茶色の瞳の保持者、植草チサトがそこには立っていた。有磨は、もう一人の茶色の瞳の保持者に向き直る。
「え――トオルさん。苗字を教えてもらってもいいですか？」
トオルは通常通りにこやかな笑顔で答える。
「植草だけど・・・どうかした？」
有磨の頭の中で、トオルとチサトが兄弟というシナプスでつながれた。

チサトが制服からの着替えのため、その場を後にしたのち、ちょっとした沈黙が流れる。
「さっきの続き――僕らはリアルブレインを継承する一族なんだ。」
トオルはさびしげな表情で肩を落としながら、沈黙を遮る。
そのさびしげな表情に疑問を持ちつつ有磨は言葉を漏らす。
「そんな一族が・・・」
「どのくらい前からかは分かんないけど、知識の保持と能力の保持、それを代々継承しているんだ。ちなみに、日本だけでも数家系、詳しくは知らないけど外国にもあるらしいよ」
ハキハキとした口調でトオルは説明を続ける。
「たいていの家系は、世間に表だって出ずに集団で生活していたり、国の特別機関に配備されていることが多い。あと身近な例でいうと、9割は一般人のトリックだけど、世間でいう超能力者や宗教関係で名を売っている者も多い。やっぱ持っている能力が特殊だからね」
そして・・・と言ってトオルは有磨に向かってぐっと身を乗り出す。

「あの事件の犯人の死体、君の友人の腕を見る限り、僕の推測では・・・君の特異能力は、物質と物質を切り離す力だね」
そう言って、口を一文字にして黙っていた有磨にトオルはウィンクを飛ばす。
「えっと…リアルブレイン？を持つ人間は皆同じ能力なんじゃ・・・？」
そのウィンクに有磨は冷静な疑問文で返した。
「それが違うんだ。君の場合は物質と物質の切り離しやすい狭間を敏感に感じてしまうんだね。それでおそらく触れるだけで狭間の部分がずれて、切り裂くことに繋がるんだ。僕の場合は、物質と物質の間を見通すことができる。ま、論より証拠だね」
少し陽気さを見せながらトオルは視線をドアの方向に向ける。
沈黙――――
ガチャ
ドアノブが捻られる。
そして、あまりさっきと変っていないがおそらく部屋着スタイルなのだろう、紫パーカーに制服スカートのチサトがこの空間に足を踏み入れた。髪はひとくくりにまとめられている。いわゆるポニーテールというやつだ。
そのチサトにトオルは爽やかな笑顔で語りかける。
「そういえば今日はチサトには珍しく柄物だな。水色の縞模様か」
そして、トオルはなぜか笑顔をそのまま有磨に向ける。有磨はなんのことかわからないままその笑顔を受け止める。
すると、その笑顔はバットに打たれたボールのごとく何かに打たれ、有磨の視界から消えた。その何かとは言うまでもなくチサトの蹴りなのだが・・・。
チサトはそのままキッと有磨を睨む。その顔は激しく動いたためだろうか、真っ赤に染まっていた。
「あんた想像したらぶっ殺すわよ！」
チサトは興奮気味で有磨を指さし、有磨にとって不可解な忠告をす

る。
「何のことだか・・・」
口を開いた瞬間、有磨はなぜかチサトの拳を間近で見ることになった。肌で、いや、顔で感じることになった。わかりやすく言うと顔面を殴られた。
そして、気を失い地面に這いつくばる間際、有磨の瞳が有磨の脳にトオルの発言の意味を語りかける。
チサトの下半身でひらひらと舞う布――――その中身――――――
あ――――そういうことか――――。
有磨はしばしそのまま、気持ちよく眠ることになった。

有磨はまた夢を見た。
自分のものでない記憶、自分のものでない真実の夢を・・・。

太陽がまぶしい。
右手にはドライバー、左手にはボルト、ドアの修理。
これが俺の仕事――――いや、『ドア』の修理がじゃない、依頼されればたいていのものは何でも直す『何でも修理屋』というとこだ。
頭に巻いていた白いタオルが灰色に染まり、つなぎを腰に巻きつけているために上半身で唯一身につけているタンクトップも汗で肌に一体化した頃、ドアは本来あるべき姿にもどっていた。
安堵のため息をつきながら、彼は汗が噴き出す額を拭う。すると、彼の肩に誰かの手がそっと置かれる。振り返ると、そこには優しい微笑みで彼を見上げる老人が立っていた。
「コウくん、お疲れ様。事務所に戻ろうか」
コウは力強くも汚れなき笑顔で返答する。
「はい、大沢さん」
大沢才蔵、彼は5年前ブライトシティを追い出され路頭に迷ったコウ達を拾ってくれた恩人である。コウの現在の雇い主でもある。

コウもかつてはブライトシティの住人であった。両親を亡くし、貯金も尽きた頃、このデプレストエリアに放り込まれた。それからずっと大沢のもとで世話になり続けている。
「しかし、君たちに出会ってもう5年か・・・」
事務所兼大沢の自宅の扉を開くと同時に、大沢は口を開いた。
「すると、コウくんも２０歳になるのか。・・・。弟さんも無事、中学卒業間近。君の昔からの夢も叶いそうだね。弟さんをブライトシティに返してやることだったよね」
そう言って大沢はまたもや優しい笑顔でコウに安らぎをもたらす。
「はい、高校も決まり、寮も確保できたのであとは見送るだけですね」
コウも肩を落とし、安堵のため息をつきながら微笑みを返す。
この事務所は大沢の自宅も兼務しており、大沢の年齢と同様にあちらこちらにかなりの年数が感じられる。しかし、そんな壁のひびや染みもコウにとっては心地の良いものであった。
「あと、これは今日の依頼者の差し入れ。こっちでは珍しい太っ腹な人だったね。弟さんにもっていってあげるといい。」
そう言って、大沢はお菓子の詰め合わせのようなものをコウに差し出した。
「ありがとうございます。弟も喜びます。」
大沢の手からコウの手へ詰め合わせの箱が渡る。すると気のせいか、大沢の手が震えているのにコウは気がついた。よくよく見ると顔色も悪いように思える。
「大沢さん、顔色が悪いですよ。お疲れなんじゃないですか?」
ビクッと大沢の肩が震える。
「あ、あ…少し疲れているかもしれないな…。すまない」
大沢は椅子に腰を落とし、また呟く。
「すまない…」
大沢の視線はコウではなく地面を見つめていた。そんな大沢に違和感を覚えながらもコウは大沢の後ろに立ち、肩を揉みほぐす。

「何をそんなにあやまっているんですか。大沢さんには元気でいてもらわないと困ります。今日は早めにお休みになってください」
すると、大沢はやっと視線を地面から切り離しコウに向ける。
「すまない。コウくんも早く戻りなさい。弟さんが待っているだろう」
大沢はいつもの笑顔に戻り、コウを送り出す。
「はい。ありがとうございます。それでは、また明日」
「ああ、また明日」
また明日、そんな言葉をお互いに残し二人は本日の別れを終えた。

夕焼けがデプレストエリアを照らす。一般的に見ればきれいな景色に見えるだろう。しかし、コウはそれを感じることができなかった。コウにとってはデプレストエリアの景色はどれもこれも灰色にしか見えなかった。
黒と白の混沌とする世界。そんな世界でコウの人生を色づけているもの、それは弟への想いのみであった。
「おい、早く乗り込め」
黒スーツの男らが数名の人をトラックに蹴り込む姿がコウの眼にとまった。
この黒スーツの奴らは、いわゆるヤクザとかマフィアの部類で、まとめてデプレスターと呼ばれている。
デプレストエリアが政府の介入なく、かろうじて社会性を保っていられるのはこのデプレスターの統治によるもので、彼らのビジネスのために必要最低限の社会性が維持されている。
つまりは、このデプレストエリアでは住人はすべて彼らのカモであり、彼らがここのルールと化している。
そして、トラックに詰め込まれている人々は彼らのカモになり、麻薬で餌付けされ、搾取されるだけ搾取され、不要になった人々である。
あのトラックで、ブライトシティとの境界である白い壁の近くに運

ばれ、捨てられる。麻薬で正気を失った彼らは誤ってブライトシティに侵入しようしＳＭポリスにより処理される。それでめでたくデプレスターは手を汚さず廃棄物を処理できる。
コウは拳を痛いほど強く握り占める。
しかし、その痛みでも、自分はどうすることもできないという現実により絞めつけられるコウの心の痛みを相殺することは全くできなかった。
コウは歩みを速める。
しかし、こんなことがなくともこの場所は痛みであふれている。路地裏で放置されている死体、動けなくなり壁際に腰掛けることしかできなくなった老人、そして、親を亡くして放浪する子供たち。昔の自分らのように・・・・・。
「ください」
両手を掲げ物乞いをする少女がコウの脇目にとまる。このようなものから目をそらせば少しは痛みから逃れることができるかもしれない。しかし、コウにはできなかった。
「ごめんな」
お金はあげられない。弟のユウのために必要だから。
そして、コウは先ほど大沢から受け取った詰め合わせを差し出した。
「ありがとう」
少女は目を輝かせながらそれを受け取り、友達らしき子たちのもとへ駆けていった。
こんな状態であっても人と分かち合うことを忘れない無垢さにコウは驚く。こんな子たちを守れる強い男になりたい、コウはその時そう思った。

数の少ない光の灯る窓。その中の一つに古臭いアパートの二階部屋の窓があった。コウの住む部屋だ。
ユウは何をしているだろう。
そんなことを考えているうちにコウは階段を上がり部屋にたどり着

いていた。
「兄さん、おかえり」
ちゃぶ台を前に据え、腰を地べたに下ろしているユウがコウに視線を送る。
「また勉強していたのか。とりあえず受験は終わったんだ。そんなに勉強しなくてもいいんだぞ」
「そんなことはできないよ。兄さんが僕のことをブライトシティに送ると決めた日から、僕も兄さんをブライトシティに連れ戻すって決めたんだ。そのためにも政府に入ってこの国を変える。こんな世界間違ってる・・・ってかっこつけすぎたかな？」
ユウはらんらんと輝かせた瞳を恥ずかしさでうつむかせる。
「そうだな。まぁ、ブライトシティで女くらいつくらないとかっこつかねーな」
ユウの言葉を誇りに思いながらもコウはからかいの言葉をユウにぶつける。
「ここに来てずっと働きづめだった兄さんを差し置いてそんなこと・・・」
一瞬の間ができる。コウは気のせい程度にユウの視線が自分の股間あたりに視線がいっているのを感じた。いや、感じてしまった。
「ユウ、お前もしかして俺のこと童貞だと思ってんな？」
「えっ」
「やっぱりな。安心しろ。俺も１５歳まではブライトシティにいたんだ。こんな肉体派のスポーツ万能を女の子が放っておくはずないだろ」
「・・・・・」
「まぁ、ユウみたいな内気なガリ勉君はブライトシティに行ってもモテないだろうけどな」
コウの挑発の言葉にユウはたれ目の優しい瞳をつり上げる。
「っっっつ、わかったよ！　彼女ができたらいち早く兄さんに知らせてやる。うらやましがらないでよ」

「あぁ、楽しみにしとくよ」
そんなどうでもいい会話をつづけながら日常生活の必須行事（食事等）を終え、コウ達は床に伏せた。
しかし、本日コウにはショックな出来事がひとつあった。ユウに童貞だと思われていたこと。そして、それが事実であること。
肉体派のスポーツ万能、モテていたこと、それはあながち間違いではなかったが、コウはそれ以上にカタ物であった。
俺、魔法使いになってしまうかも・・・・
「魔法使い」そんなコウの予感はある意味で最悪の形で現実になる。

いつも通りの朝を迎える。昨日も夜遅くまで勉強していたのだろう、隣ではユウが死んだように睡眠に従事している。そんなユウを横目にコウは事務所に向かうことにした。
青いはずの灰色の空、白くも清潔感のない壁、慣れることのない混沌な空気、何もかもがいつも通りであった。
そして、事務所に着き、かわり映えのしない一日がまた始まるかのように思えた――
「ん、ドアが開かない」
いつもなら大沢さんが開けておいてくれるはず。
だが、コウが何度ノックしても中からは物音ひとつしなかった。
病気にでもかかって寝入ってしまっているのか。
そんなことをコウは頭の片隅に置きつつも数十分その場で待機したのち、事務所を後にした。
その後、コウは毎日、事務所を訪れた。
不審に思わなかったと言えば嘘になる。
しかし、それ以外にコウができることはなかった。
そして、ユウのブライトシティへの出立を1週間前に控えた日の午後、そいつらはやって来た。
コウとユウのいつも通りの談笑を遮り、部屋全体を揺さぶるようなノック音が鳴り響く。

この来客にコウは身構え、ユウは完全に怯えていたが、それ以降のドアの向こうは沈黙を守っていた。
不気味な沈黙であった。
コウは警戒を解かずにユウを背に回し、そのドアを開く。
そのドアが地獄に繋がる扉になっていたことも知らずに。
ドアを開くと、そこには死神のような不吉な笑みを浮かべるスーツの男が立っていた。コウは即座にこの来訪者が何者であるかを悟った。デプレストエリアでスーツを着用している組織、それはデプレスター以外あり得なかったからだ。
コウがこの来訪の理由に関して動揺と思考を廻らしている中、死神は口を開いた。
「私はデプレストエリア東京１４地区を任せられている瀬川というものです。大沢才蔵さんの件でお訪ねさせていただきました。ちなみに本日はお話だけですので暴力はやめてくださいね。うちの連れも凶暴なんでね」
そう言って瀬川は、わざとコウに悟らすようにアパート前を陣取る黒い車とそれを囲うように立つ３人の大男に視線を向けた。
太陽の下に出ているわけでも、運動しているわけでもないのに、コウの体からは汗が噴き出していた。
とても嫌な汗だった。
大沢の名がでたことに疑問を抱きつつ、冷静を装いコウは返答する。
「大沢さんがどうかなさいましたか？」
瀬川の笑みに不吉さが増す。
「単刀直入にいいますと、大沢事務所が我々に借金をしていた。そして、大沢才蔵は身元をくらました。すると、大沢事務所に残るのは片山コウさん、つまりあなたというわけです」
コウは愕然とした。
大沢が突然いなくなった理由、最後の日に大沢が多用した「すまない」という言葉の意味、そのすべてが電気信号のように体中に駆け巡り、コウの全身の力を奪った。

棒のように頼りなくなった足を踏ん張らせ、コウは瀬川に問う。
「金額は・・・」
まるでコウの反応を楽しんでいるかのように瀬川は沈黙を置き、その質問に答える。
「２０００万円です。あなた方がもともとブライトシティに住んでいたこともわかっています。親戚や知人の伝手でどうにかなるでしょう。期限は一週間後です」
瀬川はそれだけ述べ、一歩下がって丁寧に礼をする。
そして、あの死神のような笑みで「では、また来ます」という宣言を残し、コウの前から姿を消した。
その直後、全身の力が抜けコウは地面に膝を落とす。
親戚・知人・・・いないわけではない。しかし、誰もかれもコウ達が両親を失い、財産を失い、困り果てたときそっぽを向いた連中だ。とてもじゃないが助けてもらえるとは思えない。あの大沢ですら逃げ出したのだ。人の思いやりなど当てにならない。だからと言って、デプレストエリア内で準備のできる金額でもない。
コウはうずくまってひたすらに考えを巡らした。
「にいさん」
ユウの声。その声に反応し、コウが顔を上げると心配そうに見つめるユウの顔があった。自分が守るべきもの、それを再認識しコウは決意する。
あと少しなんだ。立ち止っている場合じゃない。
コウは立ち上がり身支度を整える。
「ユウ、俺はしばらく家を空ける。ユウは何も心配するな」
声なく頷く弟を残し、コウは家をでた。
希望を、人の思いやりを信じぬく決意をして・・・。

?

?.

有磨は目を覚ました。目を開くと染みが点々とした天井が広がっていた。カーテンから差し込む光が妙にまぶしい。長く眠っていたような気もするが、傍らに置かれたデジタルで時を刻んでいる時計をみるとトオルと会談していた時から小一時間ほどしかたっていないことがわかった。

「あら、起きたの？」

ドアの重々しい開閉音とともにチサトが部屋に入って来た。そこでやっと有磨は頭の痛みに気付き、自分が病室で寝ていた理由を理解した。

痛みを訴える個所を有磨がさすっていると、チサトはそばにより口を開く。

「地面に頭をぶつけたみたい。だから、頭の痛みは私のせいじゃないわ」

そんな道理通るわけあるか、と有磨は心で呟いたが、枕元の冷却パック、チサトの手に握られている替えの氷の袋、そして何よりチサトの動揺を隠しきれないながらも強がりをする表情に免じて声に出すのはやめた。

「トオルさんはどうしたの？」

ふと、有磨の頭には、蹴りを入れられていたトオルのことが思い出された。

「もう診察に戻ったわよ。あんたみたいにやわじゃないからね」

「あぁ、そうかい」

有磨は冷たく言い放ち、トオルはいつもこんな仕打ちをうけているのだろうかという思念とトオルに対する同情を巡らせた。するとチサトが少し不安げな顔でうつむいていることに気づく。

「俺は別に怒ってはいないから」

その一言にチサトは安堵の表情を浮かべる。有磨はチサトの意外なピュアさに冷たい物言いは控えようと心に決める・・・が、即座にチサトの表情は変わる。
「あんたが私に怒る理由なんかないんだから当たり前よ」
・・・有磨は同時に、慰めるのもやめようと心に決めるのだった。
そんなとりとめのない会話が続くこと数分、窓に夕焼けが映し出され、有磨は夕方になっていたことに気づく。
「んじゃ、頭の痛みも引いてきたから俺帰るわ」
すると、体をベットから押し出そうとする有磨の手をチサトが掴む。
「トオルにいが、まだあんたに用があるから帰らないでほしいって。診察ももう終わっているだろうから行きましょう」
「トオルにい」と言うかわいげのある呼び方に有磨が意外さを見出していると、チサトはあの力強い腕で有磨をずいずいと引っ張っていく。
たどり着いたのは診察室。だが、トオルのいる様子はない。
「ここじゃないとしたらこっちよ」
そう言ってチサトは方向転換し、さらに強く有磨を引っ張っていく。有磨はどこに連れて行かれるかについてもはや無関心になり、チサトにひきずられるがままに身を委ねた。
チサトは急に立ち止り、有磨の手を離す。どうやら目的地にたどり着いたようだが、有磨は今まで掴まれていたヒリヒリする腕をさすることに専念した。
チサトが扉を開く。
すると、チサトの背中越しに窓からさす太陽の光と共にトオルの姿が目に写った。
しかし、そこにはトオルだけでなく、傍らのベットに腰掛けるもう一人の姿があった。
その後ろ姿に有磨は心当たりがあった。
有磨は思わず、その人物の名を呟く。
「翼・・・」

すると、その後ろ姿はこちらを振り向く。
「君はだれ？」
透き通った瞳、その言葉が嘘のはずはなかった。
有磨は翼を背に走り出していた。涙が止まらない。
自分は何から逃げているのか。翼を傷つけた事実なのか、家族を失った事実なのか、それともそんな事実が顕在する世界なのか、有磨にはわからなかった。
気付くと有磨は病院の門のあたりまで来ていた。いつも病室の窓を眺めている場所。そこで有磨はうずくまり、涙と荒れた呼吸を止めることに必死になった。
どのくらいの時間そのままにしていたのだろうか。
呼吸が整った頃、顔を上げるとトオルがそこには立っていた。
「落ち着いたかい？」
トオルの医者らしい優しい声がかかる。
「ええ」
有磨はそれに返答する。
「チサトのことは許してやってほしい。君らのことを彼女は何も知らなかったんだ」
「わかっています」
その後ちょっとした沈黙が流れ、有磨が口を開く。
「あの・・・チサトは・・・？」
「説明をしたらショックを受けてしまったようでね。一人で部屋に戻らせた。動揺したもの同士を会わせるのもどうかな、と思ってね」
トオルはそう言って少し陽気に肩をすくめる。
「そうですか・・・。チサトに聞いたのですが、トオルさんが俺にまだ用があるとか・・・？」
「その件ならまた明日でいい。今日は帰りなさい」
有磨は少し躊躇するが、そのまま頷く。
「そうさせていただきます」
そして重い足取りで病院をあとにした。

有磨が去ったのちの病院では、トオル、チサト、翼が残された。
病室に戻ったトオルは翼に声をかける。
「騒がしくしてしまってごめんよ」
「いえ・・・」
とりあえずの返答はしたものの、実際のところ翼はこの騒ぎの要因が自分にあることに気付いていた。
「あの人は誰だったんですか？」
ベッドで横たわる自分の体を見ながら、翼は疑問をもらした。
「ゆっくり思い出せばいいよ」
トオルは穏やかな笑顔で返答する。
翼にとって、トオルの言葉は実に温かいものであった。しかし、何も思い出せない自分に歯がゆさを感じることも揺るがない真実だった。
今日出会ったあの人物に関しても、顔は毎日見ていたし、知ってはいた。
病院の前を毎日訪れる姿。
毎日、窓の外ばかり見ている翼にとっては注目せざるを得ないことであった。
だが、それ以上のことは知らなかった。
あの人は今頃、何をしているのだろう――――――。
そんな興味が翼の心の奥底に小さく芽生え始めていた。

病院からの帰り道。
自宅が見えるころになると、有磨は玄関の前の人影に気付く。
「有磨くん、遅い」
遠くまで通るような声をあげ、ホノカがその場には立っていた。
「あ・・・いや・・・」

有磨には待ち合わせをした覚えはない。
「お母さんがたまには有磨くんもうちでご飯食べようって」
「いや、俺はいいよ」
人と話すのは苦手になってしまったし。
すると、ホノカは有磨の腕を優しく掴み引っ張っていく。
「そんなこと言わないの」
?誘(いざな)う?その言葉にぴったりの誘導であった。
同じ行為であっても行動する人でこんなにも違うのか。
有磨はそう思いながらホノカに引っ張られていった。
有磨たちがホノカの家に着くと、ホノカの母はすでに準備してリビングで待っていてくれていた。そして有磨は平凡な挨拶を交わし、そのままは夕食の席についた。
「なんか有磨くん雰囲気変わったよね。思春期かな?」
ホノカの母が陽気に会話の火蓋を切った。
「昔が子供過ぎただけですよ」
有磨は当たり障りのない返答をする。
「でも、そろそろ彼女とかできたんじゃないの?」
その答えを有磨が考える間もなく、隣から声が上がる。
「いないよ!・・・ね?」
ホノカであった。
「何であんたが応えるのよ」
と、ホノカの母が的確な指摘をするが、その顔には意味ありげな雰囲気がただよっていた。
ホノカは顔を真っ赤にし、一瞬黙りこくるが、話をそらすように話題を切り換えた。
「そういえば、今日会った植草チサトさんって植草トオル先生の妹さんだったのね」
そのことは有磨にとって認知済みの事実であったが、ひとつ気になることがあった。
「何でトオルさんのことを?」

それを聞いてホノカは首をかしげる。ちなみに言い忘れていたが、ホノカはよく首をかしげる。
「だって、植草先生は翼くんの担当医だよ。いろいろな科を廻っても回復できなかった翼くんを預かってくれたの。有磨くん知ってるよね？」
ホノカは有磨が翼の見舞いに行けていないことを知らない。
有磨は少し焦りながら返答する。
「あ・・・いや、そうだな」
ホノカはその後もふに落ちない表情を浮かべていたが、有磨はそのまま食事を続けた。
夕食が終わり、有磨が食器等を片付けようとすると、ホノカの母が微笑ましげな顔で言葉を発する。
「有磨くん、家では一人なわけだし、いつもシャワーなんでしょ。お風呂入れるから入って行きなさい」
ホノカの母の微笑ましげな顔は何かあやしい。
「いえ、もう夜遅いし結構ですよ」
有磨は丁重に断る。
「遠慮しないの。客間で待っていなさい」
ホノカの母はそう言うと、有磨を客間まで誘導した。
客間の前までたどり着くと、有磨は扉を開くように促される。
それに従い静かに扉を開くと、眼に入る光景に有磨は驚きを隠せず声を漏らす。
「ここは・・・」
ホノカの母はこちらを見て、さらなる笑顔を有磨に放つ。
「あなた達の小さい頃の遊び部屋をそのまま客間にしたの。懐かしいでしょ」
それだけ言うと、ホノカの母は有磨を残し、去って行った。
昔の写真、絵、玩具、すべてがそのままだった。その中でも大きく飾られていた写真には、まだ幼児であった自分と、ホノカ、翼、そして母と母に抱えらた赤ん坊の優香の姿があった。

有磨は気付くと涙を流していた。

ホノカの母が戻った居間では親子の会話が行われている。
「ホノカ、お風呂入れたらそのまま入っちゃってくれる？」
「えっでも、どうせだから有磨くんが一番風呂の方がいいんじゃないかな？」
そう返答し、ホノカは首を傾げる。
「あの子のことだから、どうせ遠慮するに決まっているわ。そんなことしていたらどんどん夜遅くなっちゃうから。いいわね？」
ホノカの母は、ホノカに諭すように話すが、その顔は相変わらず笑顔であった。
「わかった」
ホノカは首を傾げたまま応え、風呂場へと向かっていった。

有磨が追憶に浸っていると、居間から声がする。
「有磨くん、お風呂入ったから入りなさい」
ホノカの母の声であった。
有磨はその指示に従い、風呂場へと足を運ぶ。服を脱ぎ、風呂に入る準備を整えるも、頭はなお追憶の中にあった。そのはっきりしない頭で、有磨は風呂場の戸口を開ける。
すると、思わぬものが有磨の瞳には入ってきた。
紫の色素を含んだ繊維、きれいに古い細胞が取り除かれた美しい肌。それらが適度に水分を含み、キラキラと輝いている姿。
入浴中のホノカであった。
「・・・・・・」
「きゃー！！！！」
沈黙を先に破ったのはホノカ。さすがの有磨もこれに対してはおどおどする以外なす術はない。
そこにホノカの母が待ち受けていたかのように素早く駆けつける。
「どうしたの？」

現状を聞かれるがホノカは湯船に深くまで身を沈めているため、有磨が応えようとする。
「ホノカが先に風呂に・・・」
「お母さんのせいでしょ！」
湯船からのホノカの追求の声。
すると、ホノカの母の微笑みが顔いっぱいに膨らむ。
「昔はよく一緒にお風呂に入ってたでしょ」
呆然の沈黙。
「どれだけ前の話よ！」
ホノカが当然すぎるツッコミをする。
幼稚園の話だ。
一方で、有磨も心の中でホノカに便乗するのであった。

その後は仕切り直して、有磨も無事入浴を終えた。帰りはホノカの母の勧めにより、有磨は女の子に送られるという状況に陥っていた。
まぁ、家は隣なのだが・・・。
「私ね、昔へんなこと考えてたんだ」
ホノカが話を切り出す。
「変ってどんなことだ？」
「私たち、昔から3人で仲良かったじゃない？でも、ドラマとか漫画の世界だと男2人に女の子1人って女の子の取り合いになるパターンが多いと思うの」
「んー確かに」
「それで私も幼心に少しその展開に憧れてたんだ」
「そっか・・・」
「でも、逆の展開になっちゃった。翼くんは記憶を無くしちゃうし、有磨くんは何か離れていくように感じる」
「そんなこと・・・」
「でもね、私は離さない。有磨くんの手もしっかり握って、有磨くんを逃がさないからね」

照れを少し匂わせながら微笑むホノカの顔。
二人は切崎家の門にたどり着き、ホノカは踵を返す。
「それじゃ、また明日ね」
そう言って、ホノカは軽やかなスキップで帰って行った。
その上下する後ろ姿に有磨は少し可愛らしさを感じた。

その日、有磨はまたもや夢を見る。
昼の、悲しき物語の続きを・・・。

コウが訪れたのはブライトシティへのゲート。
ブライトシティに入る合法的手段は二つ。一つはしっかりとした身分証明の上にブライトシティに籍を置くものが身分保障すること、もう一つは高額納税をした上で発信機のついた腕輪を装着しての入場である。
期間は三日。どちらの方法であっても厳しい監視下に置かれる。
コウのとる方法は後者。
前者はいまのところ希望は薄であるし、後者であればユウに持っていかせようとしていた学費の余りでなんとかなる。この際、文句は言っていられない。
コウは文字通りデプレストエリアの入場者というレッテル、腕輪をはめられ、古巣ブライトシティに踏み込む。

コウは公園のベンチでうなだれていた。決意を胸にブライトシティに踏み込んでからもう二日がたっていた。親戚知人廻りをすること数十件、ほとんどで居留守を使われた。ひどい場合、ドア越しで直接「かかわるな」とまで言われたところもあった。残ったのは一日という滞在時間と絶望だけ。
自分がブライトシティの人間にとって厄介者でしかないことを改めて感じ打ちひしがれていると、正面に女性が立ち止る。

「ひょっとして片山くん？」
目の前の女性にコウは驚いた。見間違えるはずもない。それはコウの中学時代の初恋相手、西嶋サキであった。その恋が実っていないことは言うまでもない。
「西嶋さん、久しぶりですね」
緊張でコウの声はこわばる。
「やっぱり。こんなところで何やってるの？」
「いや・・・」
コウは答えるべきか迷う。
「ん～？私の家すぐ近くなの。いろいろ話したいし、うちに来ない？」
コウは答えるまでもなく。サキの誘いに従った。
サキの家はとても広い。それらのことからサキの家族が裕福であろうことは容易く感じ取れた。コウはサキの誘導で居間に通され、お茶までいただいた。久しぶりに人に歓迎される気分であった。
「で、この数年間なにをしていたの？同窓会でみんなに聞いても誰一人答えてくれなかったのよ」
サキは中学2年のとき親の都合により転校していた。それによって、コウ達が両親を失ったことも、デプレストエリアに放り出されたこともサキは知らない。
「・・・・」
コウはまたもや答えるべきか迷った。
サキも他の知人と同じかもしれない。
コウがデプレストエリアの住人であることを知ったら、サキもコウを厄介者扱いするかもしれない。
それがコウは怖かった。
「言いたくないならいいわ。ただ片山くんの身につけている腕輪を見て心配になっちゃっただけだから」
「え、気付いてたんですか？」
「当たり前でしょ。これでも眼はいいのよ。じゃなきゃ、5年も会

っていなかった片山くんにすぐに気付くわけないでしょ」
「確かに」
コウの顔から笑みが漏れた。
この人にはすべて話して大丈夫。他の人とは違う。
そんな風に思えた。
そして、コウは話し始めた。両親を失ったこと、デプレストエリアでの生活、２０００万円のこと。
「大変だったのね」
そう言ってサキは涙を流す。急の涙にコウは戸惑う。
「いや・・・」
コウの言葉を遮り、サキはコウの拳を握る。コウの鼓動が高鳴る。
「ちょっと待っていて」
サキはそう言ってその場を去り、何かを手に帰ってきた。そして、コウに向き直りそれを両手で丁寧に差し出す。
「少ないけど、これを使って」
それは銀行の手帳であった。コウは突然の出来事に戸惑いを見せる。
すると、サキはさらに強く言い直す。
「使って」
コウは躊躇をなお見せながらも、それを受け取り中を開く。
「１２００万・・・！？　何でこんなお金を？」
「私の学費」
サキのさっぱりした返答にコウは驚く。
「そんなもの受け取れないですよ」
「いいの。うちならどうにかなるから。ただね、片山くん・・・」
サキは意味ありげに間を置き、コウを見つめる。
「はい？」
「敬語やめない？」
コウの顔に笑顔が戻る。サキの昔から変わらぬ陽気さにコウは心を温める。
「確かに。久しぶり過ぎて緊張していたみたいだ」

「それじゃ、受け取ってくれるわね」
コウは手帳を強く握りしめる。
「本当にありがとう」
サキはその言葉を待っていたかのようなはじける笑顔をコウに向ける。
「お茶、入れ直してくるわね」
そう言って、コウを部屋に残しその部屋を出た。
一人になっても高揚が収まらない。
西嶋さんに本当に話してよかった。
その時、心からコウはそう思えていた。

「あの子はだれ？」
いつの間にか帰宅していたサキの母が見計らったようにサキに声をかけた。
「中学時代のお友達よ」
「あの腕輪は？」
母の指摘にサキは少し苦悶の表情を浮かべる。
「訳ありなの」
「どんな訳があって、あなたがデプレストエリアの人間に多大な金額を譲るの？」
サキには母が反対するだろうことはわかっていた。だが、ここで折れるわけにはいかない。ゆっくり説明すればわかってくれるはず。
「貸しただけよ。後で話すわ」
「ちょっと待ちなさい」
母の声に反応せずサキは足を速める。
早くコウを帰らした方がいい、そんな予感を感じた。
お茶を入れ直す最中、サキは少し物思いにふけった。
片山くんに会えてよかった。
またこちらに戻ってきてほしい。
そして、お茶を入れ直すと先ほどの直感に従いサキはコウの待つ部

屋に急いだ。
部屋に向かう途中の角を曲がると母が視界に入った。手には受話器が握られている。かすかに聞こえる母の言葉。
「・・・れで、脅迫のようなかたちで。はい、デプレストエリアの人間ですから・・・」
サキは驚愕し、先ほど入れてきたばかりのティーカップを落とす。
「どこに電話してんのよ！」
サキは全力で駆け寄り、受話器をひったくった。

ガンッ！！
物がぶつかる音。その音が高揚に浸っていたコウを現実に引き戻す。
振り返ると窓ガラスが割られていた。そして、次の瞬間、完全武装した集団が中に雪崩れ込むように入ってきた。肩にはＳＭの文字。
「ＳＭポリス！？」
コウは気が動転した。
俺は何かしたか。
まだ時間も残っている。
そんな中ＳＭポリスはコウを抑え込む。だが、コウも大男。抑え込むにも一筋縄ではいかない。
コウは動転したまま抵抗を続ける。這いずりながらどうにか部屋のドアまで近づき、無理やりこじ開ける。
すると眼に入ってきたのは、受話器を片手に持つサキであった。
「え？」
その瞬間、コウは何かを悟ったかのように無気力になった。全身の力が抜けた。
そして―――完全に押え込まれた。

獄中という暗闇の中、コウは高揚とは全く逆の状態になっていた。
受話器を片手に持つサキ。あれは明らかに通報の電話である。
サキも他のブライトシティの人間と同様、自分を厄介者とみなして

いたのだろうか。
すると、手帳は誤って部屋に入れてしまった自分をおとなしくさせておく物だったのだろうか。
そして、コウは気付く。
時間がない。
残された時間はあと四日。
ユウがデプレストエリアで待っている。
そして、コウは今まで以上の悔しさと絶望にしばらくうなされることになった。

疑いが晴れたのか、コウがデプレストエリアに釈放されたのは、その三日後。時間は一日しか残されていなかった。
コウの頭に残された手段は一つ、大沢のように身元をくらますこと。
コウはユウの待つ家に急いだ。
ユウに限っては明日になればブライトシティに発つことができる。
一刻も早くここを去らなければ。
コウは家のドアをあけ、声を上げる。
「ユウ、この場所を去る。すぐに――――」
ユウの姿がない。
代わりに残されていたのは、ちゃぶ台の上に置かれた一枚の紙であった。
そこには一言、「担保代わりに弟さんは預かります」とだけ書かれていた。
コウの全身の毛が逆立った。
くそっ、なんてことだ。期限以内にお金を返す手段はもうない。
俺にできることは・・・。
コウは意識をしっかり持つために自分をなぐった。
決意は固まった。
そして、コウは家を発ち、今度は悪魔の待つ巣窟に急いだ。

何階まであるのだろうか。デプレストエリアで唯一、そり立つビル。デプレストエリア１４地区の者ならだれでも知っているデプレスター瀬川事務所。
あたりにはデプレストエリアには珍しく死体も浮浪者も見かけない。人が寄りつかないからなのか、奴らがきれいさっぱり消しているからなのか、それはわからない。
コウが中に入ると、受付の女性が手際よく出迎える。その場だけ見るとまるでブライトシティにいるかのように錯覚してしまうほど人も建物もしっかりしていた。
「片山コウと言います。瀬川さんとお会いしたいのですが」
それを聞くと女性は最上階まで案内してくれた。しかし、その顔には少しおびえた様子が見て取れた。
「どうぞ、ごゆっくり」
最上階に着くと女性は決まり文句を終え、コウを残して降りて行った。
エレベーターから眼を背き視線を移すと、コウの前には轟々しい扉が待ち受けていた。その扉が自動的に開く。
中には何人かのスーツの男、さらに奥にはあの男が堂々とした姿で座っていた。
「片山さん、いらっしゃったんですね」
悪魔の口はささやく。
コウはドアをくぐり、根負けせず瀬川の前に出る。
「交渉のために今日は来た」
悪魔はそっと微笑む。
「と、言うことは、やはりお金は準備できませんでしたか」
「その通りだ。だから、お前らが預かっているユウではなく、俺の身を売りに来た」
「兄弟愛、素晴らしいですね～」
わざとらしい言葉を述べながら、瀬川はふざけた拍手をコウに送る。
「何とでも言え。ユウには未来がある。それに俺は力仕事には慣れ

てる。お前らにとってもユウより俺の方がいいはずだ」
瀬川はそれを聞くと、自分の表情を隠すようにコウに背を向け、窓の外を眺めるようにした。
「そうですね～。しかし、困りました」
コウの全身の毛が何かを察知したかのように逆立つ。だが、疑問を問いかけずにはいられない。
「何がだ？」
瀬川は窓を眺めたまま返答する。
「実はあなたが逃げたかと思って、もう売っちゃったんですよ。歴史的に日本に恨みをもつ中国人には高値で売れるんですよね～。ユウくん？のような未来を持った日本人青年は」
コウの膝が悲鳴を上げながら崩れた。
「遊ばれた上に殺される。そんな未来を知った状態でトランクに詰められるとき、彼が涙ぐみながら何と言ったかわかりますか？」
コウの意識はすでに朦朧としていた。全身の毛穴から水分が噴き出し、体はガタガタと震えていた。
悪魔はとどめを指すようにこちらを振り向き、満面の笑みを浮かべた。
そして、コウに向かってゆっくりとささやく。
「『兄さん、ごめんね』だと」
直後に響き渡る悪魔の高笑い。
コウの頭に激しく流れるユウの笑顔、怒った顔、そして涙。
コウの目の前は真っ白になった。

自分たちを厄介者扱いするブライトシティの人間――
信用を裏切った大沢やサキ――
ユウの未来を奪ったこの世界――

こんなの認めない――
こんな世の中――――俺は、認めない――――。

そして、気がつくと有磨はまたホノカによって起こされていた。
夢の記憶も、その頃には遠い記憶と化していた。

?

?.

今日も昨日と同様に学校が終わるとチサトが迎えにくる。
「また明日でいい」の言葉から推測するにトオルのお使いであろう。
昨日のことがあったのでどんな顔でくるかと有磨は思っていたが、
なんてことはない。依然と変わらぬチサトであった。
チサトのことだから相当強がっているのかもしれない、そんな疑念
も有磨は持っていたが、あまり気にしないことにした。
「そういえば、トオルさんって昔からあんな感じなの？」
有磨が口を開いた。本当にその場限りの好奇心だった。
「あんなって何よ？」
チサトは唇を若干とがらせ、有磨に返答する。
「ん…なんというか、悟りきったような…」
「子供の頃はよくいじめられていたわ」
「誰が？誰に？」
「私が！　トオルにいに！」
チサトが身長差による上目づかいで眉をつり上げているのを見て、
有磨は取って付けたような感想を漏らす。
「へー今のトオルさんからじゃ考えられないな」
トオルがチサトをいじめている姿を想像すると同時に、優香に意地
悪していた自分の記憶も有磨の頭の中では想起されていた。
「私が１０歳くらいの時に急に雰囲気が変ったのは覚えてるわ」
「何かあったの？」
ふと口にでた疑問。
「わからない」
チサトはさらに唇を尖らせ、そっぽを向いた。
いじけているようにも見えるチサトのその様子を見て、有磨はそれ
以上この話題に触れないことにする。

すると、チサトが急に歩きのペースを落とした。
「でも…」
「ん？」
「そういえば、あの時のトオルにい、変な夢をよく見るって…」
「夢…」
「脳のことだからリアルブレインが関係しているって可能性もあるけど、何しろわからないことが多いから…」
有磨は思わず立ち止った。
その時、有磨は感じる何かがあるように思えたが、それが何であるかは分からずに考えるのをやめた。
その後もチサトとのトラブルはなく、二人は横に並んで病院への道を歩いた。
そんな中、有磨は一つことに興味を沸かせる。
チサトはどんな能力を持っているのだろう。
トオルは自分らのことをリアルブレインを継承する一族だと語った。
すると、チサトも何かしらの能力を持っているはず。
思ったまでも、なぜか聞けないまま有磨達は病院に到着する。
「やあ、来たね」
医者は暇なのだろうか、昨日と同じくトオルは軽いノリで有磨を出迎える。
そして、そのままチサトは着替えに向かい、有磨とトオルは一対一で診療室に向かった。
「今日は君にリアルブレインの使い方を身に付けてもらうよ」
トオルの調子は気のせいか重い。そしてトオルは続ける。
「何で今頃、僕が君に声をかけたのか気にならなかったのかい？」
確かに。
有磨は頷く。
「リアルブレイン、それは昨日僕が言った通り絶望によって引き起こされる。つまりは、今の日本社会ではかなり起きやすくなっている。そして原因が絶望であるだけあってリアルブレイン保持者はこ

の世への破壊衝動に駆られやすい」
トオルは有磨に向かってぐっと乗り出す。
「むしろ、君のように落ち着いているのは珍しい」
有磨はまた一つ疑問を覚えるが、口に出すより先にトオルがそれを察知したかのように疑問に答える。
「ちなみに僕らは幼少のときから訓練を受けているんだよ」
トオルは心の中まで見透かすことができるのか、と有磨は思った。
「そして、ここからが本題だ。レリジオンキラーと呼ばれている事件を知っているかい？」
有磨は過去を思い返した。昨日、大画面で見た、教祖を名乗る者などが連続で殺害された事件。それがレリジオンキラーと呼ばれていることはホノカ達との夕食の席で聞かされていた。あの理由なく有磨が悪寒を覚えた事件である。
「知っています」
「あの連続殺人が同一人物だと確定されているのは死体が全部同じ状況で発見されているからなんだ」
「どういうことですか？」
「全員、頭蓋骨を開かれている状態で発見されたんだよ」
有磨は自分の背筋の端から端に至るまで寒気が伝道するのを感じた。
「一般人から見るとただの殺人狂にしか見えないだろうけど、僕らからすると違うんだ」
トオルは足を組みかえる。
「リアルブレインの保持者はリアルブレインの能力を奪うことができる。その方法は相手の脳を直接見ること。脳のしわ、解剖学用語だとノミアナトミカがバーコードのような働きをしていると考えている人もいるが、そんなことはどうでもいい。つまり、この事件はリアルブレイン保持者がリアルブレイン保持者を狙った殺人なんだ」
有磨は理由なき悪寒の意味を見出した気がした。
やな予感は当たるものだ・・・・。
「だが、超能力者・マジシャン・宗教関係の部類にリアルブレイン

保持者がいることは昨日言ったが、犯人は当たりにはまだ辿り着けていない。まぁ、ホントのリアルブレイン保持者は政府機関の情報操作でわからないようにされているしね」
「そうであれば安心なんじゃ・・・」
「でも油断することはできない。このまま殺人が続けば当たる可能性もある。そして、君も例外じゃない。それで君にも自分を守る術を身につけてほしいわけだ」
いきなり自分のことを振られ、戸惑いを隠せなかったが、有磨は頷くしかなかった。
「んじゃ、はじめようか」
トオルの軽い調子が戻り、有磨の修業ははじまった。

修業と言っても、場所は診療室、目の前にするのは牛乳ビンであった。
目標は牛乳ビンを割ること。有磨は牛乳ビンを睨む。
トオルによると・・・
「リアルブレインの発動条件は、気を高ぶらせること、物そのものをみること、この世の認識を否定すること」だそうだ。
3つとも言葉で聞くとかなり簡単に感じる。2つめ、3つめに限っては、リアルブレインを一度覚醒させた時点でスタート地点にたっているらしい。だが、どれも結びつけるには抽象的過ぎた。
有磨はビンを睨んだまま、頭を抱えた。
すると、有磨は背中に刺すような視線を感じる。振り返ると、言うまでもなくそれはチサトのものであった。
本日の服装は昨日と色違いの赤パーカー。髪はふたくくりにまとめられている。いわゆるツインテールというやつだ。
チサトは髪型に何かしらのポリシーでも持っているのだろうか。
「何やってんの？」
チサトの質問。
「修業」

有磨はこのときまだ気付いていなかったが、牛乳ビンを相手に頭を抱える姿は予想以上にイタかった。
「どうだい？　調子は？」
トオルの再登場。今までどこに行っていたかは分からない。
有磨は、うなだれながらその質問に答える。
「全くできません」
「そっか」
そして、次の瞬間、トオルは何かを投げた。牛乳ビンであった。しかも思いっきり。有磨に向かってでなくチサトに。
相手がチサトであったとしてもビンは危険すぎる。
危ない。
そう思い、有磨はビンに向かって手を伸ばす。
その瞬間、ビンにあの緑の閃光が現れた。
有磨は迷いなくビンに触れる。ビンは粉々になった。
そして、チサトの危機は回避された――――が、有磨はチサトに殴られる。
「はじくだけでいいでしょ！どうしてくれんの！」
牛乳ビン。中身はもちろん牛乳。
チサトは牛乳まみれになったのであった。

トオルと有磨にある程度の説教を終えると、チサトはまた着替えに向かった。
そして、トオルは気を取り直す。
「有磨くん、今の感覚はどんな感じだった？」
有磨は考えた。
今の感覚、気は高ぶっていた。だが、トオルの言っていたことと何かが違う気がする。
何が違うのだろう。
有磨が答えを出せずいると、トオルはさらに言葉を発する。
「質問を変えよう。同じことを今、また出来るかい？」

有磨はまた考えた。
感覚は残っている。根拠はないができる気がする。
「できると思います」
「そうかい？　それじゃ、また挑戦してみよう」
そう言ってトオルはまた新しい牛乳ビンを有磨の前に置く。
有磨はまた牛乳ビンを睨む。そして感覚を呼び醒ます。
気を高ぶらせる――――。物そのものを見る――――。この世の認識・・・この世を否定する。
最後が違う気がする。否定することは確か。だが、対象が何であるか。
牛乳ビンに緑の閃光が現れる。
何が違うのか、その答えは結局、有磨の脳内で結論は出なかった。
だが、どうにか感覚は呼び醒ませられたようだった。
有磨は牛乳ビンに触れ、対象は砕ける。
「どうやら感覚を掴んだようだね」
「まだよくわかりませんが」
「まぁ、慣れると思うよ。ただ実はね、リアルブレインを呼び醒ますのは簡単なんだ。本当に難しいのはリアルブレインを抑え込むことなんだ」
有磨はトオルの言葉に疑問を覚える。
「今回はすぐに収まりましたよ？」
「今回みたいなパターンはいい。気の高ぶりを押えられない時が一番難しい。もとが破壊衝動だしね」
「抑え込む方法はあるんですか？」
「『心を鍛える』そんな抽象的なことしか言えないかな」
そう言って、トオルは申し訳なさそうに、そして同時に白々しく頭をかいた。
有磨は少し考え込む。
気の高ぶりが押えられない時、おそらく初めてリアルブレインが発動した時がそれなのであろう。

もうあの時のようになりたくない。翼を傷つけたあの時――――
「よしっ」
何が、？よしっ？なのか不明極まりないが、トオルが座の体勢からいつのまにか歩きに転じていた。
「有磨くん、こっちにきてくれるかい？」
トオルのいる場所、そこには何もなかった。あえて言うなら壁。
有磨はトオルの指示に従い移動する。
「次の対象はこれだ」
トオルが指す物。それは言うまでもなく壁。
しかし、有磨は我慢できず質問する。
「これって壁ですか？」
「みればわかるだろ？　できないかな？」
「できる・・・と思いますけど、こんなところ壊したら・・・」
さっきは、ビンそのものがすべて粉砕された。一つの物体すべてにリアルブレインの効力が及ぶとしたら、今回の場合、病院全体が崩壊することになる。
有磨にそんな不安がよぎる。
「大丈夫」
トオルは言い切る。
「わかりました・・・」
有磨は渋々行動に移る。
壁を睨む。
気を高ぶらせる――――。物そのものを見る――――。何か・・・を否定する――――。
壁に緑の閃光が走った。有磨はそれに触れる。
壁が見事に粉砕された。穴の大きさは直径2メートルほど。土埃ならぬ壁埃が舞う。
「やはり思った通りだ」
トオルが一人で納得の表情を浮かべる。
「何が思った通りなんですか？」

「君の切り裂く能力は君の視界の範囲内でのみ効力が及ぶようだよ。あとは、君の気持次第で真っ二つにも、粉々にでもなるってとこだろう。」
有磨は穴の大きさを確認し、納得する。
しかし、もし予想を外していたらどうする気であったのだろう――――
有磨は寒気を感じた。
壁埃もだいぶ落ち着く頃になると、トオルが後ずさっていることに有磨は気付く。表情は相変わらず笑顔で穴の方を見つめていた。
有磨は先ほど感じた寒気とは別物の寒気を感じ、穴の方向に向き直る。
すると昨日に引き続き、思わぬものが有磨の瞳に入ってきた。
茶色の色素を含んだ繊維、壁埃に妨害されながらも輝きを放つ肌、その肌に上下セパレートで纏われた水色の繊維。
下着姿のチサトであった。
バコッ
ホノカの時と違い、沈黙を破ったのは人の声ではなくチサトの拳であった。その拳の会話対象は有磨の顔面。
そして、有磨は認識する、トオルにはめられたことを。

今回は前回のように気絶まではしなかった。ただ、前回と同じ空きの病室で、ダメージのある箇所を冷やすことに変わりはなかった。
しかし、この展開も二度目である。有磨もさすがに腹がたった。
今回はチサトにしっかり言ってやらねば・・・
有磨は決意する。
チサトが氷を運んできた。その瞳はうつむいていたが、開き直った発言をするだろうと前回の経験が有磨に告げていた。
チサトが顔を上げこちらまっすぐ見る。
「ごめんなさい」
素直に謝られた――――。有磨は衝撃を受ける。
普段とのギャップがある分、何も言えない。むしろ可愛いささえ含

まれている。
何と得な性格なのだろう。
「いや、俺も悪かったし・・・」
挙句の果てに有磨はフォローを始めた。
チサトは安心したようにため息を吐く。
「というか、一番悪いのは・・・」
チサトの声にいきなり張りがでる。
その続きは有磨にも理解できた。
二人でそのあとに続く名を言葉にする。
「トオルにい！」
「トオルさん！」
有磨とチサトの初めてのシンクロと思いきや、語尾は少し違っていた。
むしろ有磨がチサトの言葉に合わせれば、おかしなことになるので当たり前のことなのだが。
そして、有磨はトオルのいる診療室にまた向かう。チサトも同行する。
まだ用が終わっていないのもそうだが、文句を言わねばならないからだ。
珍しく有磨が先導し、診療室の重い扉をスライドさせる。
少し開き、少し中が見えた瞬間、チサトに有磨は押しどかされた。
「キョウちゃーん」
チサトが中にいた赤髪長髪の女性に抱きつく。年齢はおそらくトオルと同じくらい。身長はヒールを入れれば有磨より少し大きいくらいだ。
傍でトオルはその光景を微笑ましくみていた。
「有磨くんどうしたんだい？　そんなところで寝て」
トオルが扉の前で横たわる有磨に気付いた。
「いや、何でもないです」
有磨は何も言えずにチサトを軽く睨む。

すると、チサトよりも早く、赤髪の女性がその目線に気付く。
「なに、あの男の子、チサトのボーイフレンド？」
その言葉にチサトは敏感に反応する。
「あ、あんなとこで寝てるようなのが私のボーイフレンドのわけないでしょ」
押し倒したのはお前だけどな・・・
有磨は心の中だけで呟く。
「ぱんぱん♪」
意味深な擬音語と軽快な手打ちでトオルが場面の展開を促す。
そして有磨に向き直り、赤髪の女性の紹介を始める。
「彼女の名は、植草キョウ。僕らの一族のひとりだ。一応、親戚ということになる。僕にとっては幼馴染。チサトにとっては姉みたいなもんだ」
トオルによるキョウのまんまプロフィール紹介が終わると、チサトはいかにもそれを煙たがるように、キョウに質問をする。
「それよりキョウちゃん。今日はどんな用事で来たの？」
キョウはチサトの茶色い髪を優しく撫でながらそれに答える。
「これから仕事に向かうんだけど、その前にトオルに伝えることがあってね」
「その仕事のこと何だが・・・」
トオルが二人の会話に割り込む。
「彼も一緒に連れて行ってほしいんだ」
『彼』そこにいる誰もが誰のことか疑問に思った。だが、ご丁寧にもトオルが指さす先はあくまで有磨。
「え、俺？」
有磨はあくまで定型文のような当たり前の返答をした。
「彼女の行先はデプレストエリアなんだ。ある意味ではリアルブレインが一番生まれやすい。有磨くんも一度見ておくべきだよ」
「でも・・・」
「ちょっと待って」

有磨の返答を遮り、キョウが話においてかれじと声を上げる。
「何でこの子を連れてかないといけないわけ？」
「この子は見るべきだと僕は思う。それにデプレストエリアはお世辞で言っても安全な土地ってわけじゃない。君が付いていれば万々歳だ」
「でも、この仕事も安全ってわけじゃ・・・」
キョウの言葉をトオルが遮る。
「キョウ」
一息ついて悟らせるようなトオルの一言。
「頼む」
一瞬の沈黙。
「あーわかったわよ」
キョウが折れた。
トオルはキョウの妥協に対して、いつも通り陽気に礼を告げる。
「ありがとう。きっと有磨くんも君の力になると思うよ」
そして———気付くと有磨のデプレストエリア行きが決まっていた。

「そういえば、植草さんのお仕事って何ですか？」
デプレストエリアに向かう途中、有磨はキョウに質問を投げかける。
「植草だとトオル達と聞き分けつかないじゃない。キョウでいいわ。まぁ、キョウって名前もあんまり好きじゃないんだけどね。キョウって今日みたいで、今のことばかり考えて後先のこと考えてないみたいじゃない。どうせなら明日がよかったわ」
それでは名前としておかしすぎるだろ。
有磨は心の中だけでツッこむ。
キョウは有磨の思考など関係なしに話を続ける。
「そういえば、仕事の話ね。職業は政府直属のリアルブレインの秘密組織。今回はデプレストエリアの情報収集と調査よ。最近、政府の機密情報部が襲撃されてね。上の指令で１４地区があやしいってことになったわけ」

「そうなんですか。でも、そんな秘密っぽいこと俺なんかにしゃべってよかったんですか？」
「あっ、駄目だっだ。まぁ、言っちゃったもんはしょうがないわ」
まったく後先のこと考えてないよ。
有磨は心の中だけでツっこむ。
キョウは有磨の思考など関係なしに会話を続ける。
「有磨くんの能力はなんなのー？」
「トオルさんが言うには『切り裂く』ことらしいです」
「へー便利そうね。ちなみに私は『燃やす』能力よ。百聞は一見に如かずってねー」
そう言って、キョウはたまたま通りかかったごみ置き場に軽く触れる。
すると、キョウの触れた部分が何の前触れもなしに勢いよく燃え上がった。
「私は物質の摩擦を敏感に感じ取れるのよ。それを応用するとあんな感じ」
キョウは自慢げな様子。
「能力について理解はできましたが、あんなとこ燃やして大丈夫だったんですか？」
「あっ、まずかったわね。まぁ、やっちゃったもんはしょうがないわ」
まったく後先のこと考えてないよ。名前としっかりマッチしてるよ。
有磨は心の中だけでツっこむ。
そんな会話もそこそこに、能力つながりで有磨はチサトとの帰り道に持った疑問をキョウに打ち明ける。
「そういえばチサトもリアルブレイン継承の一族のひとりなんですよね？どんな能力をもっているんですか？」
あれだけ明るみに満ちていたキョウの顔が少し曇る。
「それは本人に聞いた？」
「いえ、結局まだ聞けてません」

キョウの顔に少し安堵の表情が浮かぶ。
「そう、それはよかったわ」
「どういう意味ですか？」
キョウは少しかしこまった様子を見せ、話し始める。
「あのね有磨くん、継承の一族と言っても能力の発現条件は一緒なの」
「絶望ってことですか？」
「そうよ。一般人より能力が発現しやすいってのもあるけど、基本的には継承してきた知識の利用による幼少時の能力発現が、一番の継承を可能にする要因ね。簡単なのだと、大好きにさせた玩具を目の前で壊したり、大好きにさせたペットである動物を目の前で殺したりね。発現すればあとは訓練次第よ」
「ひどい話ですね」
そこで、キョウは憂鬱そうにため息をつく。
「勘違いしないで、もっとひどいのはそれ以降。一族にとって能力の発現は絶対の優先事項。物、動物で駄目だった場合、次はどうなると思う？」
一瞬の間。
「次は人よ」
有磨の背筋に一瞬、寒気という稲妻が通り過ぎる。
「でも、それとチサトにはどういう関係が・・・？」
「チサトはね、物や動物では発現しなかったの。それで次の段階に及ぶ前にトオルがチサトを連れて一族を飛び出した。だから、チサトは能力を持っていないの」
「そういうことですか・・・」
有磨はそれ以上何も言えなかった。
「一つ覚えておいてほしいのは、リアルブレインを持つ人はどんな人であれ何かしらの過去を持っていること。それは君も然り、トオルも然り、私も然り…」
「はい…」

それは有磨自身が一番理解していることだった。
本当の絶望なんてものはそう簡単におきたりなどしない。
キョウの後先考えない性格も何かしらの過去によるものなのだろうか。
有磨は小さく肩をおとす。
「ウソ。あんまりテンション下げないで。私に限っては何も覚えてないわ。トオルに関してはあんな行動を起こすほどだから何かしらあったんだろうけど、私も知らないの」
思うところでもあるのだろうか、キョウは遠目で空を見上げるようにする。
「まぁ、あんなへらへら野郎のことだから大したことでもないのかもしれないけどね」
キョウの元気づける言葉も、その時の有磨には少しチクチクしたものに感じられた。

気がつくと有磨たちはデプレストエリアへのゲートに着いていた。
通常通りなのか、政府直属のキョウの同行だったからなのかはわからないが、手続きは至って簡単だった。
要は行方不明になっても自己責任というわけだ。
その簡易手続きを終え、有磨はキョウの後に続く。どうやら出口はまだ先のようだった。
うす暗く何もない廊下が続く。
デプレストエリアに対してここまで閉鎖的になる必要があるのだろうか。
有磨は思った。
しばらく進んでいくと———出口。
視界が開けた。
ここで先ほどの有磨の疑問は解消されることになる。
目の前に広がるのは灰色の世界。
白い壁の周辺だけ清潔にされ、それ以外の場所は、死体、老人、そ

れを気にも留めない人々。
知っているようで知らなかったデプレストエリアの現状に有磨は恐怖すら感じた。
しかし、有磨は気付いた。その中でも純色のもの。こちらをじっと見つめる子供。
「キョウさん、あの子供は？」
キョウが有磨の指した方向を向く。
「あぁ…、あれは孤児ってやつよ。ここじゃ珍しくないわ。ブライトシティから出てきた人に物乞いをしているのね」
有磨が何とも言えない深刻な表情になっているのに気付き、キョウは忠告を付け足す。
「なにか恵んであげようとは思わないことよ。私たちみたいのを狙ってるのは何もあの子だけじゃないんだからね」
有磨は頷くしかない。
「はい…」
「よろしい。それじゃ、二人で移動する前に私はちょっと情報収集に行ってくるから。有磨くんは壁際から離れないでね。壁際ならSMポリスの管轄内だから」
有磨の中で、壁際のみ清潔であるという謎が解けた。
「わかりました」
「んじゃ、行ってくるわ」
そう言って、キョウはヒールのわりに軽い身ごなしで駆けて行った。

?

?.

一人残された有磨。
どうしてもさっきこちらを見つめていた子供の方向を見てしまう。
目が合う。すると、子供はだんだんとこちらに近づいてきた。
近づくにつれ、容姿がはっきりしてくる。どうやら女の子のようだった。
自分も親はいない。環境に恵まれてなければ自分もこうなっていたのだろう。
そう思うと有磨はいたたまれない気持ちになった。
気付くとポケットの中を探っていたが、渡せるような物はなかった。
女の子は目の前まで来ていた。だが、それ以上は近づかずじっと立ち止っていた。
有磨が何か渡せるようなものはないかと考えを巡らしていると、自分の左腕にある腕時計に気付く。
それは父親の形見であった。そこそこ高価であろうことも予想できた。
有磨は無言でそれを差し出した。
口が利けないのだろうか、女の子も無言でそれを受け取る。だが、瞳は大いに輝いていた。
そして、それを持ってもとの方向へ駆けていく。
その瞬間、有磨は悪寒を感じる。
その理由はすぐわかった。女の子の駆けていくすぐそばに男が立っていた。
その男は不気味に笑っていた。
男はタイミングを見計らって女の子を蹴り飛ばす。とてもじゃないが小さな子供に向けるような蹴りではなかった。
女の子は衝撃のあまり時計から手を離した。時計は地面に落ちる。

うずくまる女の子。時計を拾い上げる男。
有磨は激しく後悔した。
キョウの「恵んではならない」という忠告。
それはこのことを指していたのだ。
うずくまっていた女の子は立ち上がり、すでにその場を立ち去ろうとしていた男を追いかける。そして、体当たり。
今の女の子できる最大限の悔しさの訴えだった。
もちろん男はそれをあざ笑うかのように撥ね退ける。それだけで済まさず自分の背中に手を伸ばす。
有磨からは男が手を伸ばそうとしている物が見えた。
腰に刺されているのはナイフ…というより短剣に近かった。
有磨は思わず駆けだしていた。
「壁際を離れるな」というキョウの忠告はすでに有磨の頭にはなかった。
男は短剣をゆっくりと抜く。女の子はすでに男の手のうちにあった。
有磨の眼に浮かぶ過去と重なり合う光景――――
男は短剣を振り落とす。
くそ、間に合わない――――
有磨が諦めかけたその瞬間だった。
誰かのものである一本の腕が短剣の行く手を阻んだ。表現通り短剣がまるで玩具のように腕の表面で止められたのだ。信じ難い光景であった。
有磨は安堵する。それと同時に頭に過去の映像が駆け巡る。
女の子――――自分が助けることのできなかった優香の姿――――――。
体がガタガタと震える。息がしづらい。
世界が不安定にぐるぐる回っているようだった。
「おまえ、大丈夫か？」
体が言うことを聞かない状態で有磨はどうにか顔を上げる。
すると、目の前には頭にタオルを巻いた大柄な男が立っていた。

「どうやら落ち着いたようだな」
頭にタオルを巻いた男、その男は自分のことをデプレストエリアの住人だと名乗った。しかし、有磨には他の人々と違うように思える。その男は灰色ではないように感じられた。
「ほらよ」
男から有磨に手渡されたのは時計。有磨が女の子にあげた時計だった。
「俺が食料と交換してやった。あんな幼い子にこんな高価な物を持たせるのは危険だ。優しさはしっかりとした思慮の上に成り立つもの。気をつけろよ」
有磨は自分の浅はかさにうなだれる。
「すみません…」
男はそんな有磨の頭を優しく小突く。
「ま、お前みたいなやつ俺は好きだけどな」
力強い笑顔であった。
色に例えると白。
有磨はそう思った。
「そういえばさっきのお前の…過呼吸ってやつかな。なんかトラウマでもあるのか？」
普段の有磨なら「何も言わない」という選択肢を選んでいただろう。だが、今は違った。この男にはでまかせは効かないように感じた。
「去年、家族全員を失いました。ちょうど妹があの子くらいの歳でした」
男は静かなため息を漏らす。
「なるほどな・・・」
だが次の瞬間、顔つきが変わる。
「ん、それってもしかしてデプレストエリアからの不法侵入者が一家を殺害したっていう事件か？」
男は尋常ならざる興味を示していた。
有磨は気押されながらもそれに答える。

「はい。でも、何でそれを？」
「そりゃあ、一家殺害も不法侵入もめったにあるわけじゃない。当時は話題になったもんさ。なぜ、ＳＭポリスが侵入を許したのか？ってね」
有磨の記憶にも、そのようなことは多少残っていた。
「そうでしたね」
「苦しい思いをしたんだな…」
男の眼の奥に少しだけ涙が浮かんでいるのが見え、有磨は戸惑う。
「いえ…そんなことは…」
「俺も家族を失ったからよくわかるつもりだ」
そう言って男は有磨の頭に優しく手を乗せ、力強く撫でた。
温かい手だった。この男の心は本当に真っ白でまっすぐだった。
そこで、有磨は思い出したかのように抜け落ちていた疑問を提起する。
「そう言えば、さっきの男はどうしたんですか」
その言葉を有磨が発すると、男の顔つきが明らかに変わった。
先ほどの興味による変化ではなく、怒気…憎しみ…に満ちた顔だった。
そして、その顔で男は言う。
「・・・殺した」
体中に悪寒が走る。有磨は何も言えない。
「殺す…消す。あんな奴らはみんな消す。この世界は間違っているんだ…」
そう言って男はうつむいた。
有磨はその時、理解した。
この男が灰色でないことを。白と黒、両方を持つ男であることを。
そして、有磨は考えるべきだった。
こんなにも真っ白な心を持つ男が、なぜ黒を持たなくていけなくなったのかを。
「すまない」

男がうつむいたまま言葉を発した。
「変なことを口走ってしまったな」
あげた男の顔には力強い笑顔がもどっていた。
「何はともあれ、俺はお前のことは好きだ。名前は？」
「切崎有磨です」
勢いにのまれるまま有磨は答えた。
男はぐいっと上を向いて背伸びをする、有磨からは顔が見えないほどに。
「ゆう…まか。いい名前だな」
ちょっとした間が空く。
「それじゃ、すまない。俺は行くところがあるからここいらでお別れだ。また会えるといいな、有磨」
男は有磨に背を向け歩きだす。
有磨はあっけにとられながらも最後に尋ねる。
「あの・・・名前は？」
男は振り向かない。
「片山コウだ。コウと呼んでくれればいい」
その言葉と手を少し掲げた後ろ姿だけを残し、男は去って行った。
少し寂しげのある大きな背中だった。

その数分後、キョウは帰ってくる。
有磨は壁際で待っていた。
「私がいない間、何もなかった？」
「はい」
有磨はウソをついた。
キョウの集めてきた情報によると、この１４地区のデプレスターはすでにほぼ壊滅状態らしい。かなり前に何者かにトップが入れ代わり、その時に生き残ったデプレスターの残党は強制的にその男に突き動かされているということだ。
だが、住人はそろって「今の方が安心した生活をおくっている」と

言う。その何者かを崇拝し、心の拠り所にしている人も少なくないそうだ。
「私はデプレスターの事務所に調査のため潜り込みにいくわ。予定になかった危険な仕事よ。あなたはどうする？」
知っているようで知らなかったこの灰色の世界。
純粋無垢な少女。
白と黒の両方を持つ男。
有磨はもっと知りたいと思った、自分のいるこの世界を。
「俺も、行きます」

暗い路地を進み、汚れた角を曲がって辿り着いたのは、白い壁と同様に周りの状況からは考えられない清潔さを保った建物であった。
高さもかなりある。
「有磨くん、こっちよ」
キョウに誘導されたのは建物の裏。
「ここ何もありませんよ」
「いいの。侵入する前にまずは偵察よ。ここに覗き穴をあけて」
有磨はキョウのサラッと言った言葉に疑問を覚える。
「俺に言ってるんですか？」
「そういう能力なんでしょ。隙間でも小穴でもいいから早くお願い」
「いや、でも俺はまだ能力を・・・」
「いいから早くやんなさい！　男の子でしょ！」
有磨の不安をよそにキョウは有磨に喝を入れる。
何を言っても多分やらされる。
有磨はそれ以上の反抗を諦める。
対象の切り裂かれ方や大きさは有磨の気持ち次第とトオルは説明していた。
有磨は投げやりな気持ちで実行を決意する。
気を高ぶらせる――――緑の閃光――――。
明らかに、病院でやっていた時よりも意識してから緑の閃光が現れ

るまでのスパンは短くなっていた。
後は対象に触れるだけ――
轟音を鳴り響かせ、能力が発動。穴が貫通する。しかし…
「ちょっと！　目立ち過ぎ！　穴でか！　これじゃ敵に・・・」
予想外の穴の大きさに騒ぐキョウ。穴は直径2メートルほど。
有磨にとっては予想の範囲内のことであったが、やはり能力のコントロールは難しいようだった。
土埃が落ち着く。キョウは敵の応戦を警戒し身構えていたが、中に人のいる気配はなかった。
本当に誰もいない。
その後も、有磨とキョウは一階ずつ順々に上がり、一部屋ずつ順々に回ったが、キョウの求める情報はもちろん人っ子一人いなかった。
そして、最後の階である最上階。
有磨とキョウは他の階と同様に誰もいないだろうとそこを訪れた。
だが、それは間違っていた。
突如鳴り響く銃撃音――――。弾は有磨とキョウの間を突き抜けていた。
眼に入ってきたのは銃を構えるスーツの男。
「横に飛んで身を隠して！」
キョウは目の前の地面に素早く手を滑らせる。目の前に吹きあがる炎。
その炎は壁となり相手の視界を阻む。その隙に有磨とキョウは物陰に身を潜めた。
有磨を奥に押し込み、キョウは所持していた銃を構える。
銃撃戦が開始した。
男もキョウが銃を所持していたことが分かると物陰に身を潜めた。
お互いに銃を撃っては身を潜め、全く埒があかない。
すると、キョウはため息をつく。
「これだから銃撃戦は嫌いなのよね」
そう言って、有磨に対してその場にそぐわない茶目っけを含んだ視

線を送る。
「ちょっとタンマ！」
その言葉は有磨にではなく男に向けられたものだった。
キョウは急に物陰から身をさらけ出し、両手を上に添えた。
「降参よ」
男も物陰から姿を現す。だが、銃口はしっかりとキョウに向けていた。
「なんだ女か。銃を地べたに捨てろ」
キョウは指示に従い、銃を捨てる。
「これでいいかしら。でもね、実は銃はもう一丁隠し持ってるんだけど、それはどうする？」
「どこに隠している？」
「胸の谷間よ」
男の深刻な顔つきに淀みが生まれる。
今まで描写されずにいたが、キョウは実はかなり豊満な胸を持っている。だから、確かに胸の谷間に銃を隠すことも可能である・・・・・はずがない。
「そんなわけあるか！」
男の妥当なツッコミ。
「嘘じゃないわ。で、どうするの？」
男の唾を飲む音がきこえるようであった。
「お前は動くな。俺が取る」
男は銃口をそのままにキョウにじりじりと近づく。
そして、銃を片手で構えた状態で、銃が隠れていると思しき部分に触れようとした。
「あら、髪にごみが付いてるわよ」
キョウが男の髪に触れる。
「だから、動くなと・・・・えっ？」
男の髪から炎が燃え上がっていた。
「ぐわあああ」

男は銃から手を離し、自分の頭で上がる炎の鎮火に必死になっていた。
「あら、ゴミじゃなくて、火が付いてるの間違いだったわ」
キョウは悠然と構え、男の苦しむ様子を楽しむかのように見ている。
「有磨くんももう出てきていいわよ」
そして、カツカツと男のそばに近づき、鎮火されかけていた男の頭を鷲掴みにして体ごと壁にぶち当てる。
「これ以上、自分の頭を丸こげにされたくなかったら私の質問に答えなさい」
「わ、わかった」
男の顔にはすでに恐怖の色が焼き付いていた。
「それじゃ、まず一つ。なぜここにいて、なぜ私たちを撃ったの？」
「ここに誰も入れるなと言われたからだ。でなきゃ、俺が殺される」
ここことはおそらくキョウ達の横にそびえ立つ轟々しい扉の向こうのことだろう。
キョウは軽くそちらを向き、また戻して質問を続ける。
「誰に？」
「一年ほど前に、ここのトップと幹部を殺した奴だ」
「その話はきいたわ。でも残党がいるって聞いたけどあなた一人？」
「今日みんな殺された。そいつの目的が今日達成されるもんでいらなくなったんだ。それで見張りのために俺だけ残された」
「一人の男によくデプレスターがそこまでやられたものね」
「奴には銃も刃物も効かないんだ。嘘じゃねぇ、本当だ」
その言葉を聞き、キョウと有磨は眼を見合わせる。
何かしらの装備、もしくはリアルブレイン・・・。
「わかったわ。他にその男について知っていることはある？目的のこととか」
「知らねぇ。俺らがやらされていたのは奴のブライトシティへの行き来を可能にすることとデプレストエリア１４地区の社会性の維持だけだ。何も知らされちゃいねぇ」

キョウはあからさまにため息を漏らす。
「そう、わかったわ。それじゃ逃げなさい、どこまでもね」
そう言うとキョウは男の頭を壁から横に乱暴に開放した。
男は躓き倒れ、何か言いたげな顔をするも何も言わずに、キョウの言うとおり全力で逃げて行った。

有磨とキョウは扉の向こうに足を踏み入れる。
部屋の壁や家具には、一年前のものだろう戦闘の傷跡が痛々しく残っていた。
その傷に有磨が見入っていると、キョウが何かを発見した。
「ビンゴね」
キョウは有磨に小さくVサインを送る。
「何かあったんですか？」
「機密情報部で強奪された書類よ」
キョウは部屋の中央に置かれた机の上でばらばらに広げられた書類をつまみ上げる。
「しかも、それだけじゃないわ」
残った片方の手でキョウは片隅にある新聞や雑誌の切れ端を指した。
その記事はどれもエンターテイメントの記事であり、マジシャンや超能力者、少数派宗教に関するものであった。とくに、「少数派宗教の教祖の奇跡を暴く」のようなミステリー的な話題のものが多い。
記事には横線が引いてあったりしたが、何よりも有磨の印象に残ったのは何人かの写真に大きく線が交差する×のしるしが書かれていることだった。
「このバツが書かれている人達は皆レリジオンキラーとか呼ばれている連続殺人で殺された人達よ。こっちの事件でも関連性ありとみて間違いなさそうね。」
そう言うとキョウは突然、自分の胸の谷間に手を突っ込んだ。
「キョウさん何を・・・」
有磨はあからさまに動揺した。

「はい、これカメラ。証拠保管のため適当にそこらへん撮ってくれる？」
キョウは当たり前のように胸の谷間から取り出したカメラを有磨に手渡そうとする。
本当に胸の谷間に物を収納するとは・・・。
有磨は何も言えなかった。
しかし、有磨がカメラを受け取ろうとすると、キョウは何かを思いついたかのように呟き声を漏らす。
「ちょっと待って。もしかして・・・」
すると急に、書類を荒々しく漁り始めた。
「あった！」
キョウは数枚の書類の束を拾い上げ、眼を通す。
その視線が、ある一定の部分で止まった。
「まずいわね。病院に戻るわよ」
そう言うと、キョウはその書類だけを掴んだまま駆けだした。
「いったいどうしたんですか？」
「説明はあと。トオルとチサトが危ないわ！」

ブライトシティへのゲートをくぐり、有磨とキョウはすでに車を病院へと走らせていた。
「レリジオンキラーと呼ばれる一連の殺人事件についてトオルから話は聞いた？」
車を大急ぎで飛ばしながらキョウは有磨に質問をした。
「リアルブレインの能力を狙った犯行という話は聞きました。それと全部はずれであったことも」
「その通りよ。そしてね、機密情報部で奪われた情報の中にリアルブレインの情報も含まれていたの。これを見てみなさい」
キョウはデプレストエリアから持ち帰った書類の束を有磨に手渡す。
「リアルブレイン保持者の名簿よ」
有磨はその書面に眼を通す。

すると、数ある名前の中で唯一、線で囲い込まれた人名が眼にとまる。
その線に囲いこまれた人名は・・・・植草トオル。
「な、なぜトオルさんが？」
有磨は驚愕の声を漏らす。
「リアルブレインの継承の一族がまとまって生活するのには身を守り合うことも理由の一つにあるの。あなたみたいなパターンはあまりリアルブレインの保持自体明るみに出ないし、事実、犯人はこれまで全部外してる。今回は確実な方法である、一族で唯一単体で生活しているトオルを狙うことにしたのよ」
「そんな・・・」
「トオルはうまく医者として生活しているし、今回のように情報が漏れるようなことでもなければ狙われることもなかったんだけどね。油断したわ」
キョウが悔しさで顔を歪ませていると、携帯の着信音が鳴る。
「ごめん。運転で手が離せないから、有磨くんでてくれる」
有磨の手に携帯が渡り、有磨は若干なる躊躇を覚えながら通話ボタンを押し、携帯を耳に押し当てる。
「キョウちゃん助けて！」
チサトの声だった。
「どうしたんだ？」
有磨は冷静に状況説明の催促をする。
「ん？なんだ有磨か。ってじゃなくて、病院が大変なことになってるの！」
チサトの説明によると病院が一人の男に襲われたらしい。もちろんＳＭポリスも重装備で駆けつけたが、簡単にねじ伏せられた。男は「その場を動くな。動けば殺す」という脅迫だけ突きつけ、患者たちはもちろんチサトやトオルも各病室で動けずにいる。
そして、男は各病室をひとつひとつ、誰かを探すように確認して回っている。男の行動は常にトオルの能力で観察しているが、目的は

わからないそうだ。
だが、有磨達にはわかっていた。目的は・・・・トオル。
「くっ、思ったより早かったわね」
悔しさで握りしめた拳をキョウはハンドルに叩きつける。
「目的はトオルよ。私たちが行くまでどうにか粘って」
「うん、わかった！」
携帯越しのチサトの返事。
一方で有磨の心では何かが引っ掛かっていた。
昨日のこの時間、トオルが居た場所・・・
「チサト、お前とトオルさんは今どこにいるんだ？」
「３０２号室よ」
有磨の予想は当たっていた。トオルやチサトだけでなく、翼にも危険が迫っていた。
有磨はチサトとの通話を切る。
「一分一秒が惜しいわ。さらに飛ばすわよ」
そう言って、キョウはアクセルをさらに強く踏み込んだ。

?

?.

到着すると、病院の周りはえらく静かであった。
ブライトシティでは異常が感知されるとＳＭポリスが速やかに処理するよう想定されているため、一般人に異常を知らせるようなセキュリティ機能を持ち合わせていなかった。
有磨達は病院内に入り込み、警戒しながら３０２号室に急ぐ。
病院内も騒然としていて、犯人の要求通り、その場を動いて廊下にでるような人間もいないようだった。
普段は駆けることを許されない病院の階段や廊下がどれも長く感じられる。
そして、有磨とキョウは奇跡的に何の妨害も受けずに、３０２号室のドアの前まで辿り着いた。
キョウがドアにノックする。
「チサト、大丈夫？」
「キョウちゃん！」
ドア越しにもよく聞こえるチサトの声。
「大丈夫よ。まだここまでは来てない」
それを聞いてキョウは胸を撫で下ろす。
「どうにか間に合ったようね。ドアはしっかり鍵をかけておきなさい」
「うん、わかった」
チサトの返事のあとに、今度はトオルの声が続く。
「キョウ、よく聞け。犯人の能力は・・・」
ガンッ
トオルの言葉を遮って、廊下の奥から壁を叩く音、いや叩き飛ばす音が聞こえた。
有磨は即座にそちらを見て思わず叫んだ。

「キョウさん、伏せて！」
壁が大きな破片となってこちらに飛んできていた。
まるで爆薬でも仕掛けられていたかのようだった。
「おいおい、動くなって言っただろ」
廊下の奥から歩み寄る足音、男の声。
その声に有磨は聞き覚えがあった。ついさっき聞いたことのある声。
だが、口調は全く違う。
有磨は顔を上げ、その姿を確認する――――
片山コウだった。
「コウさん」
有磨は声を漏らす。
コウはその声に反応し、その声の発信源を眼で探した。そして、その眼は有磨を捉える。コウの表情が少し変わった。
「ゆう――」
「そこまでよ」
威嚇の言葉とともにキョウが銃を構えた。
コウの表情は戻り、キョウを視線で殺すように睨む。
「少しでも動いてみなさい。容赦なく撃つわよ」
キョウもその視線に負けまいと言葉を発する。
だが、コウは銃のことなどまるで気にしていないかのように、脇にある簡易ベッドに手を伸ばす。
拾い上げたのは枕。そして、それをキョウに向かって軽く投げる。
「そんなもの銃の障害になんて――――」
「だめだ、キョウ。避けろ」
トオルが扉を開き、大声で叫んでいた。
キョウはその言葉に反応し、間一髪でどうにか避ける。
ガガッ
信じられない光景だった。何の変哲もない枕が壁をえぐっていた。
「奴の能力は『固める』ことだ」
トオルのその言葉にコウは反応する。

「ほう、ということは、お前が植草トオルか」
そう言って、今度は掛け布団にその手を伸ばす。
「次は避けられるかな」
そして、それをキョウにまた投げた。
廊下いっぱいにその物体は面積を膨らませる。避けることはほぼ不可能だ。
「避けきれなきゃ、燃やすだけよ」
その言葉通り、キョウは軽い身ごなしで布団との衝突を避けながら、軽くそれに触れる。
布団は散り散りに燃え上がる。
だが、それだけでは終わらなかった。
「ほう、お前もリアルブレイン保持者か」
コウはその布団の陰に潜み、キョウのすぐ傍まで迫っていた。その拳がキョウに振り下ろされる。
しかし、拳は空を切り地面へと当たる。そして隕石顔負けのクレーターを築いた。キョウは何とかそれを避け切り、距離をとる。
「これで終わりよ」
キョウは銃を構え、そのままゆっくりとトリガーを引く。
ガンガンッ
だが、次の瞬間———キョウはコウによって壁に打ちつけられていた。首はさっきの隕石顔負けの拳により絞めつけられている。
「何でよ。弾は確かにあったはずなのに・・・」
キョウのかすれ声。
「あぁ、当たっていたさ。だが、『固める』対象は何も物だけじゃないってことさ」
キョウの顔がみるみると青ざめる。
「あんた、もしかして…」
「ご名答、自分自身も例外じゃない」
その言葉の数秒後、キョウは意識を失った———。
「おい、有磨いるんだろ」

コウの有磨を呼ぶ声。
有磨は黙ったまま瓦礫をかき分け、ゆっくりとコウに歩み寄る。
有磨はこの乱戦に手をだすことができなかった。戦闘が激し過ぎたせいもある。だが、それ以上にコウに敵意を向けることが有磨にはできなかった。
有磨が近づくのを感知するとコウはゆっくりとキョウの首から手を離した。
キョウはゆっくりと地面へと体を崩した。有磨はそれを視線で追う。
「まだ死んではいない」
コウが言葉を発する。眼はしっかり有磨を見据えていた。
「有磨、こいつを連れてここから消えろ。お前は殺したくない。次、俺の視界に入った時は、こいつもお前も命はないと思え」
コウはそう言うと身をひるがえし、３０２号室へと向かっていた。

横たわるキョウを見つめて有磨は思考を巡らした。
コウの目的はリアルブレイン。
キョウをそのままにしたのは、俺を助けるためのコウの最大限の譲歩だ。
これでいいのだろうか・・・
トオルに危険が迫っている――――
チサトに危険が迫っている――――
翼に危険が迫っている――――
・・・いいわけがない。
有磨は３０２号室へと向かった。

有磨が３０２号室に出向くと、扉はすでにコウによって無残にも破壊された後だった。
中からはチサトの声。
「こっちに寄るな！」
中では、トオルに迫ろうとするコウに、端に追いやられるチサトと

トオル、壁際で恐怖にすくんでいる翼の姿があった。
「コウさん、やめてください！」
室内に足を踏み入れ、有磨は力の限り叫んだ。
コウはゆっくりと振り向く。
「有磨、消えろと言ったはずだ」
「コウさんがなぜこんなことを・・・リアルブレインを・・・」
有磨は痛くなるほど拳を握りコウに訴えかける。だが、コウの表情は冷やかになる。
「なぜかって？　この世界が間違っているからだろ」
コウは当たり前のように言い捨てる。
「この世界は壊さなくちゃいけない。だが、それには力がいる・・・。しかも俺が今まで手にかけてきたのは罪人ばかりだ。くそみたいな手品で人の弱みにつけこみ金を巻き上げる。あんな奴らリアルブレインの疑いがなくとも・・・」
コウが言葉を言いきるか否かのその時、チサトが動いた。手には金属バットが握られている。どこから出してきたのか疑問だが、この場では置いておこう。
「間違っているのはあんたよ――」
金属バットがコウに襲いかかった。
コウは軽く舌打ちをし、その打撃を片腕ではじく。
金属バットが宙を舞った。
だが、飛んだ方向が悪かった。バットの飛ぶ先、それは翼の頭――――
有磨は力いっぱい手を伸ばした。
また目の前で大切な人が傷つく。
そんなことは――――もう――――許せない。
バットに緑色の閃光が走る。有磨は手をさらに伸ばす――――そして――触れた。
「俺の大切な存在はもう傷つけさせない！」
無意識に有磨は言葉を発していた。バットが八つ裂きに粉砕される。
翼は驚きで眼を見開き、有磨は息を荒くする。一瞬、その場にいる

者すべてが黙した。
「ふふふ、ははは っ」
沈黙を破り、コウが高笑いをあげる。
「有磨、お前までリアルブレイン保持者だとわな」
「俺の能力も奪いますか？」
「いや、言ったろう。俺は力がほしいだけなんだ。有磨、お前は俺の仲間になれ」
コウの思わぬ言葉に有磨は驚く。
「そ、そんなこと…」
「この世界は間違っている。お前にも理解できるはずだ。俺とおまえは同じ経験をしているのだから・・・」
コウは有磨に歩み寄り、有磨は後ずさる。コウはなお続ける。
「実はな、６年前に俺もお前と同じようにブライトシティで両親を失った。不法侵入者によってな。つまり、お前が一年前に経験したような事件がその５年前にもあったんだ」
有磨の知らない新事実。コウはさらに有磨に歩み寄る。
「前にも言ったかもしれないが、有磨、お前自身はセキュリティ特化したブライトシティがなぜ、いとも容易く不法侵入を許したか疑問に思わなかったのか？」
有磨は黙りこくり何も答えられない。コウは答えを待たずに続ける。
「それはな、セキュリティが『機能していなかった』からなんだ。しかも、意図的に停止させられていたんだ」
「そんなことできるわけないでしょ！」
チサトがコウの言葉に噛みついたが、コウはお構いなしだった。
「それは可能だった。なぜならそれは『政府』によって実行されたからだ」
そこに居る誰もが驚愕した。
ブライトシティの治安をセキュリティで守る政府。だが一方で、そのセキュリティを停止できるのも政府のみであることは明快な事実であった。

「停止させた理由は簡単だ。自分たちの不都合な事実を隠すため。政府高官とデプレスター幹部が何らかの取引を行っている。俺が紛れもないデプレスターで掴んだ情報だ」
この情報こそ、コウが一年前のあの時、リアルブレインと共に得たものだった。
コウは一息置いて、周りを見渡したが口を開こうとするものはいなかった。
「俺を…弟を…今の状況に追いやった奴らを俺は許すことはできない。有磨、お前はどうだ？」
「俺は・・・」
有磨は肯定も否定もできなかった。ただただ黙りこくる。
「この嘘で満ちた世界を一度壊すんだ。有磨、お前なら俺の仲間になれる」
そこでコウは外が騒がしくなっているのに気付く。
目線を窓の外に向けるとＳＭポリスの応援部隊が駆け付けていた。
コウは時間がないことを認識する。
「実は、力が急に必要になったのにはわけがあってな」
コウはそう言うと自分のポケット漁り、一枚の紙切れを取り出す。
そして、それを有磨へと投げ渡した。
有磨が確認すると、それは何らかの地図であった。
「政府高官とデプレスターの取引が、また今日、行われる。それは取引場所の地図だ。俺はそこを押え、政府高官を殺して事実を公にする」
「そ、そんなことしたらブライトシティがパニック状態になるじゃない！」
チサトがコウの行動が起こすだろう最悪の状況を指摘する。
すると、コウは窓へと後ずさりながら笑みを浮かべる。
「それが狙いだ。有磨、待っているぞ」
その言葉を残し、コウは窓の外へ身を投げ出した。
着地の轟音と共に鳴り響く発砲音。だが、コウが捕まることがない

ことは確実なようにに思えた。

しばらくの間、誰も口を開かなかった。

沈黙。

すると、チサトが急に泣き崩れた。

「私にもリアルブレインが使えれば・・・・」

宝石のような涙という名の水分が、床に落ちてははじかれる。

チサトらしくない姿だった。

トオルはその頭を優しく撫でる。そして、その眼は軽く有磨を見据えていた。

有磨は考えていた。

コウの考えていること、それが正解なのか不正解なのかを。

正解であるはずがない――――

だが、不正解であるとも思えなかった――――

「有磨くん、どうするつもりだい？」

トオルが口を開いた。

「わかりません。ただ――――」

有磨は紙切れを握っている手をさらに強く握りしめた。そして、翼のいる方向へと眼を向ける。

翼は相変わらず怯えきっている様子だった。

自分が避け続けた存在。

だが、自分の大切な存在。

有磨は再認識する。

「ただ――行かないけない気がします」

有磨の眼はトオルをまっすぐ見据えていた。

「そうか。行きなさい」

トオルの表情には笑みが少し含まれていた。いつでもどんなときでも変わらないトオルの表情のままだった。

「はい」

有磨も力強く返事をし、病室の出口へと足を向けた。

後ろではチサトがトオルに何か訴えているようだったが有磨は気にしなかった。
しかし――――次の出来事に対しては有磨も気にせざるをえなかった。
「有磨くん」
それはホノカの声だった。
有磨が振り向くとホノカが扉越しに寄りかかるように立っていた。
「何でここに――――？」
有磨は驚きを隠せなかった。
「翼くんのお見舞いに来たの。そしたら、様子がおかしくて急いで病室に来たら・・・」
ホノカがスカートの裾を強く握り、俯く。
有磨は何も言えない。
すると、ホノカが急に有磨を見据え、口を開いた。
「有磨くん、行かないで」
ホノカの声は震えていた。ホノカの精いっぱいの勇気を振り絞った言葉だったのであろう。
だが、有磨の答えは最初から決まっていた。
「ごめん――――」
その後の言葉は続かない。なぜなら有磨自身、何をしに、何のために行くのかわかっていなかったからだ。
そして、有磨は歩きだした。ホノカの横を通り過ぎる。
ホノカの願いどおり、有磨はその場に立ち止りたかった。
だが、心の奥底で蠢くものがそうはさせなかった。蠢くものの正体はわからない。
後ろで、ホノカが泣き崩れる音が聞こえる。
だが、有磨は重い足を黙々と進めた。ただひたすらに進めた。

その頃、記憶を失った翼は頭を抱えていた。
先ほどの何が何だかわからないまま迎えた身の危険。

だが、翼の頭からどうしても離れないものがあった。
「俺の大切な存在はもう傷つけさせない」
その言葉と、その言葉を放った人物の姿だった。
大切な存在とは自分のことなのだろうか。
あの人物にとって自分はどんな存在なのか。
自分にとってあの人物はどんな存在なのか。
思い出したい――
眼の前では女の子が体を崩し涙を流していた。
紫色の入った髪は細やかに揺れていた。
思いだしたい――
思いだしたい――――――――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0570z/

リアルブレイン

2011年12月6日23時50分発行